

令和元年第15回

札幌市教育委員会会議録

令和元年第15回教育委員会会議

1 日 時 令和元年7月26日(金) 13時30分～17時03分

2 場 所 S T V北2条ビル4階 教育委員会会議室

3 出席者

教 育 長	長谷川	雅 英
委 員	阿 部	夕 子
委 員	佐 藤	淳
委 員	石 井	知 子
委 員	道 尻	豊
教育次長	檜 田	英 樹
生涯学習部長	鈴 木	和 弥
学校教育部長	相 沢	克 明
教育推進課長	井 上	達 雄
学事係長	茂 木	貴 徳
学事係員	奥 山	玲 太
教育課程担当課長	佐 藤	圭 一
企画担当係長	野 田	隆 之
義務教育担当係長	山 下	敦 史
義務教育担当係長	三 浦	敦 司
義務教育担当係長	阿 部	晋 也
義務教育担当係指導主事	アルティ	み お
小学校部会		
外国語小委員会委員長	島 田	裕 文
教科用図書選定審議会委員 (企画担当係長)	神 林	裕 子
算数小委員会委員長	庄 司	ひさ子
教科用図書選定審議会委員 (義務教育担当係長)	高 橋	健 一
音楽小委員会委員長	足 立	教
教科用図書選定審議会委員 (義務教育担当係長)	山 下	敦 史

理科小委員会委員長	桜	井	裕
教科用図書選定審議会委員 (企画担当係長)	鈴	木	圭一
社会小委員会委員長	附	田	裕哉
教科用図書選定審議会委員 (研修担当係長)	牧	野	宜英
総務課長	宮	地	宏明
庶務係長	松	平	健次
書記	田	中	将太

4 傍聴者 2名

5 議 題

協議第1号 令和2年度使用教科用図書の選定について

【開 会】

○長谷川教育長 これより、令和元年第15回教育委員会会議を開会いたします。
会議録の署名は、阿部夕子委員と佐藤淳委員にお願いいたします。

【議 事】

◎協議第1号 令和2年度使用教科用図書の選定について

○長谷川教育長 それでは、議事に入ります。

協議第1号は、令和2年度使用教科用図書の選定についてです。

では、改めて、私から教科書採択の流れを確認いたしますが、一昨日、事務局から説明がありましたとおり、4回の教育委員会会議を開催して審議をすることになります。

4回の教育委員会会議のうち、選定のための審議は、一昨日と本日、そして、8月6日の計3回で行い、その結果を受けまして、8月9日（金）の4回目で採択する運びとなります。

一昨日の1回目で小学校部会の六つの小委員会を対象に審議を行いましたので、2回目の本日は、外国語、算数、音楽、理科、社会の順に残りの五つの小委員会を対象といたします。

それでは、前回と同様に進めていくということによろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○長谷川教育長 まず、各種目の審議に入ります前に、教科書採択の任を負っている私たちは、札幌市の教科書採択の公正・中立性をしっかりと確保しなければなりません。

私から委員の皆さんに、確認をさせていただきたいことがあります。

前回の教育委員会会議終了後、本日までに、特定の組織や団体あるいは会社等から、働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたか。

（全委員が「なし」と発言）

○長谷川教育長 ただいま、皆さんから、影響力の行使や圧力等はなかったと回答をいただきましたので、私たち6人による協議は、教科書採択の公正・中立性を確保し得るものであると判断いたします。

では、審議に入ります。

まず、英語から始めます。

私から、小委員会委員長に確認をさせていただきます。

特定の組織や団体あるいは会社等から、働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたか。

○外国語小委員会委員長 ありません。

○長谷川教育長 それでは、外国語小委員会委員長から英語の調査研究報告(答申)のご説明をお願いいたします。

○外国語小委員会委員長 小学校部会、外国語小委員会委員長の島田です。

今回、調査研究の対象となったのは、東書、開隆堂、学図、三省堂、教出、光村、啓林館の7者、合計15点の教科書です。

これらについて、教育委員会が定めた調査研究の基本方針に基づき、外国語小委員会において、公正・中立な立場から具体的な調査研究を進めてまいりました。

まず、調査研究の観点Aである、北海道教育委員会が作成しました採択参考資料を基礎資料とした調査研究の結果についてご説明いたします。

採択参考資料のインデックスの外国語採択参考資料の外国語1ページをご覧ください。

この様式1の教科の目標をご覧ください。

新学習指導要領では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指しております。

小学校外国語では、学んだ英語を生かして、身近で簡単な事柄について、お互いの考えや気持ちを伝え合うことが重視されております。

採択参考資料の外国語3ページから外国語23ページまで、調査研究結果を示しております。

顕著な特徴が見られた2点についてご説明いたします。

まず、外国語4ページの使用上の配慮等の丸印の1点目についてです。

ここにありますように、東書では、「Small Talk」という先生や友達と短いおしゃべりを促す活動が掲載され、学習意欲を高めるよう工夫が見られました。

また、採択参考資料外国語10ページの三省堂においても、「Talk to Friends」というコーナーが設けられ、子ども同士の短いやりとりを通じて、学習意欲を高める工夫が見られました。

外国語18ページから23ページには、様式4、別記が掲載されております。

まず、外国語18ページをご覧ください。

調査項目④の北海道とかかわりのある内容を取り上げている資料等の箇所数に各教科書の特徴が見られましたので、ご説明します。

7者とも、北海道とかかわりのある内容を取り上げている資料等がありますが、教出においては、5・6年生で計16カ所に掲載されており、特徴が見られました。

次に、調査研究の観点Bの札幌市として設定する調査研究項目について説明いたします。

答申のインデックスの外国語の外2ページをご覧ください。

外国語においては、六つの具体項目について調査研究いたしましたが、そのうち、2の(1)の「話すこと(発表)、話すこと(やり取り)、聞くこと」領域における課題探究的な学習の取り扱いについてと、2の(2)の「書くこと」領域における課題探究的な学習の取り扱いについての2点において、各教科書の特徴が見られましたのでご説明させていただきます。

外5ページをご覧ください。

2の(1)の「話すこと(発表)、話すこと(やり取り)、聞くこと」領域における課題探究的な学習の取り扱いについてご説明いたします。

東書の6年、6ページをご覧ください。

この単元のディス・イズ・ミーでは、名前や好きなこと、誕生日を発表しようという学習になります。

10ページを見ていただきますと、「自分についてスピーチしよう」という活動が掲載されていますが、東書は、このように各単元の最後に言語活動が学習のゴールとして掲載されております。子どもは、毎時間、英語表現の幅を広げながらスピーチの原稿を完成させていくことになります。

例えば、8ページをご覧ください。

下のほうにある例文のアイ・ライク・ドッグズを学習してから、自分でも好きな動物を考えて英語を書いていきます。そのときに、使用するページとして、86ページのように、英語表現を毎時間「わたしのせりふ」として書きためて、原稿を完成させる構成になっております。学習したことが積み重なってスピーチ原稿が完成し、子どもが自分なりのスピーチを行うという構成により、課題探究的な学習を促すよう工夫されております。

次に、教出、6年生、44ページをご覧ください。

右上に「夏休みの思い出を絵日記にして伝えよう」とありますが、このように、教出は学習ゴールを全ての単元の冒頭に設定しております。

また、51ページの「Final Activity」のように、単元の終末には、学習のゴールとなる言語活動を位置づけており、子どもが、よりよく相手に

伝えるにはどうするとよいかを考えながら学習に取り組むことができるよう工夫されております。

さらに、巻末には、発表資料として活用できるワークシートがあり、絵や英語で表現する活動ができるようになっています。

続いて、光村、5年生、63ページをご覧ください。

右上に、自分や他の人ができることやできないことを紹介するという学習のゴールを提示した上で、69ページの「*You can do it!*」のように、先生ができることやできないことを紹介しようという言語活動をゴールとして位置づけており、子どもが目的を持って取り組むことが可能な構成となっております。

答申の外7ページをご覧ください。

2の(2)の「書くこと」領域における課題探究的な学習の取り扱いについて、各者に特徴が見られましたのでご説明いたします。

教科書、東書、6年の22ページをご覧ください。

このレッツ・ゴー・トゥ・イタリーの単元では、冒頭の見開き2ページで、行ってみたい国や地域を表現する英語の音声に十分なれ親しむよう、活動が示されています。

その後、87ページのように「わたしのせりふ」として、音声に十分なれ親しんだ単語を書き写す学習が構成されております。

また、子どもが自分の伝えたいことを英語にする上で参考にできるよう、別冊の*Picture Dictionary*が用意されています。この*Picture Dictionary*は、4線上に単語が表記されているのが特徴です。書き写す際の参考となります。このことは、市民意見としても挙げられているところです。

次に、開隆堂の6年、81ページをご覧ください。

「文字に慣れよう」というコーナーが、複数ページ、設定されており、音と文字の関係や英語で書く際の基本的なルールを学ぶことができる工夫が見られました。

次に、学図の6年、62ページをご覧ください。

「*Use & Check*」が単元末に掲載されており、学習した内容をこのページに書くことで、振り返りを促す構成となっております。

次に、三省堂の6年、73ページをご覧ください。

上のほうに「*Word Bank*」のコーナーがあります。

ここにある英単語を参考にして、自分の思いを書く活動が可能となっております。

次に、教出、6学年、75ページをご覧ください。

右上に、小学校の思い出を伝え合おうという投げかけをした上で、79ページの「F i n a l A c t i v i t y」のように、スクール・メモリー・アルバムをつくろうという活動を最後に位置づけるなど、書く目的を持って絵や英語で小学校の思い出について伝え合う言語活動が可能な構成となっています。

次に、光村、6年生、111ページをご覧ください。

中学校で頑張りたいことを発表しようという学習のゴールを提示した上で、「Y o u c a n d o i t !」のようにマッピングをして、自分のことについて豊富な表現を行うよう促す工夫が見られました。

最後に、啓林館、6年、67ページをご覧ください。

単元で学習した表現をなぞったり、書き写したりしながら、自分のことについて書く活動を促す工夫が見られました。

以上、外国語について説明させていただきました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、ただいまの説明に対しまして、ご質問がありましたらお願いいたします。

○石井委員 学習のゴールについてお聞きしたいのですが、ほとんどの教科書に学習のゴールが設定されているということだったのですが、中でも設定に工夫があったり、何か特徴が見られる教科書があれば教えてください。

○外国語小委員会委員長 英語では、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことが大切です。伝えたい、それから、知りたいという目的を持つことが重要です。この点から特徴が見られたのは、東書、光村、教出になります。

東書、6年生、18ページの宝物を伝えようというところをご覧ください。

学習ゴールを設定した上で、ステップ1にあるように、伝え合うための例文を示すとともに、巻末にコミュニケーションカードを掲載し、学習ゴールに向けて学びを重ねられるような工夫が見られました。

それから、教出、6年生、19ページをご覧ください。

巻末のワークシートを使って、自己紹介し合うという学習ゴールが示されており。

18ページに、参考になる例示を二つ掲載し、伝え合いの支援となるよう工夫しております。

光村、6年生、56ページです。

ポスターを使って夏休みの思い出を発表しようというところがあります。

ここは、ジャンプというページですが、その前のステップ1で出来事を尋ね合

おう、ステップ2で感想を尋ね合おうと、段階的に明確なゴールのもとに学習を積み重ね、そして、ジャンプの宝物を伝えようというところを行っているというような工夫が見られます。

以上です。

○石井委員 ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

○道尻委員 教科書の中で比較してみますと、英文を書き込む部分がかかなり多くとられているものと、そうでないものがあるように思うのですが、この点、教科書の中に書き込むということを、どれほど重視というか、重きを置いて考えればよいのかというところと、もしその部分で特徴がある教科書が話題になっているというようなことが小委員会のほうでありましたら、教えていただきたいと思います。

○外国語小委員会委員長 高学年で、書くこと、それから、読むことということも入るのですが、その読む、書くのハードルということが、やはり小委員会でも話題となっております、その面で工夫が見られたということで、まずは、ただ読むとか、ただ書くという練習というようなことではなくて、書いて伝えたいとか、読むことで知りたいとか、そういうような言語活動の設定が大切だというふうな話が出ております。

そういった意味で、学習のゴールという話をこの前にしましたけれども、学習のゴールが明確な東書や教出、光村には特徴があるかな、ゴールが明確なゆえに、子どもにとって、学んでいく必然性というものがあらわれるということで特徴があるかなと思います。

また一方、開隆堂なのですが、一番最初の話でもありましたが、教科書後半に独立して段階的に書くページが設けられております。これは、レッスン1のところが終わったら、続けてこちらに入るというふうになっているのですが、題材の内容に無理をして関連させずに、高学年で、初めて読むことや書くことが入るということで、独立して、段階的、体系的に勉強していくという、これもまた特徴的なところかなというふうに思います。

○佐藤委員 各者が巻末や別冊につけている単語リストの部分なのですが、先生や子どもたちが使いやすい形というか、それぞれの各者の工夫の特徴などについて、小委員会ではどうい

見解が出たか、教えていただければと思います。

○外国語小委員会委員長 絵辞典のような形で、絵とともに単語を載せている会社が多いかなと思うのです。

別冊になっている会社もありましたけれども、絵辞典等の扱いでは、子どもが、自分が言いたい英語はどのような英語になるのかなとかというときに、考えて使うという場面が想定されるわけです。その意味で、ジャンルごとに並んでいる絵辞典が使いやすいのではないかということが小委員会でも話題になっておりました。

中でも、最初にお話ししましたが、絵と単語が載っているのですが、それを4線の上に表記しているという東書については、特に特徴があるかなというふうな話が出ていました。

○道尻委員 やはり、後で書くということを考えると、4線で示したほうが子どもたちには伝わりやすいということなのではないでしょうか。

○外国語小委員会委員長 そうですね。

○道尻委員 ありがとうございます。

○阿部委員 2点お伺いしたいのですけれども、1点目は、東書さんだけが、ほかの教科書よりもサイズ感がちょっと大きいということになっているかと思えます。それで、ぱっと見た感じでは、文字もサイズが大きい分、大きい文字で表現されているなという印象があったのですけれども、これは、子どもたちにとって、サイズ感としてどのような影響があるかということ、まず、1点目にお伺いしたいと思います。

もう1点は、中学校とのかかわり、関連性について、特に工夫がある教科書会社がありましたら教えていただきたいと思えます。

○外国語小委員会委員長 まず、サイズの面ですが、この東書とともに、学図もこのサイズですね。この2者が大きなサイズです。

子どもにとってどのような影響があるかという面について、これは私見ではありますが、それぞれ、大きいと、子どもはやはり手にしやすいという部分もあるのかもしれませんが、サイズ感として、ほかのものとして、手になじむという意味ではこういうサイズもありかなと思えますし、何とも言えないかなというところがありますね。

○阿部委員 そんなに、大きさによって大きな影響があるわけではないという判断でよろしいですか。

○外国語小委員会委員長 はい。そう思います。

それから、もう1点は、中学校との関連ということで特徴のあるものということですね。

中学校に向けての、例えば、中学校に入ったらこんな活動がしたいとか、こんなクラブに入りたいというような単元は、ほぼ全者、そういうものが入っております。

特徴的なものとしては、中学校との関連では、特に発展的な内容として掲載が見られるのは東書と開隆堂ですね。

東書は、6年生の96ページに「学び方みいつけた！」というページがありますが、これは、中学校に進むあなたへということでページをつくっております。ここでは、肯定文とか疑問文とか文の構造とかそういったものが今後出てくるのですよということを紹介しております。

それから、開隆堂、6年生、104ページ、ここも「中学校へつなげよう」ということでページを割いております。

このページは、例えば、過去形のところで、不規則変化のものと規則変化のものと、いろいろあるねということで、右のページだったと思うのですが、下のほうでは、発展学習としてe dをつけるとか、つけないものもあるとか、そんな話が発展的なものとして載っております。こういったところをページを割いてつくっているという面で、特徴的かなというふうに思います。

○阿部委員 ありがとうございます。

○池田委員 北海道のほうの採択資料では、北海道にかかわりのある記載というのは、教出がやや多いというようなことだったと思うのですが、北海道、あるいは、その中でも札幌に関しても同じような特徴というふうに考えてよろしいのかということと、それに伴って、そういった身近な地域についての記載が豊富だということの英語学習における子どもさんたちへの影響や効果ということについて、何かお考えがありましたらお伺いしたいと思います。

○外国語小委員会委員長 確かに、教出が、北海道や札幌に関する写真などを非常に多数掲載しています。

英語は、地域的な、確かに身近なということがあるかなと思うのですが、英語

は、地域的なもの以外にも、子どもにとって身近で関心の湧くものとか、地域だけに限らず、そういったものがありますし、そういった事柄を題材として選ぶことも多い教科書ですので、特に札幌のことが取り上げられていなくても、英語の場合はそれほど影響がないのかなというふうに感じます。

○池田委員 ありがとうございます。

○長谷川教育長 私からお伺いしたいのですけれども、先ほど東京書籍の6年生の教科書でご説明のあった最初のオープンドアの1でしょうか、ディス・イズ・ミーというところです。ここから始まっているのですが、これは、QRコードを使ってクイズに答えていくということだと思いののですが、教室では、やはり、先生が、何かこのQRコードを使ってこのクイズみたいなものやっていくという仕組みなのでしょうか。

○外国語小委員会委員長 ここを見た限りでは、このQRコードも使いながらできるし、多分、教科書が決まったら、学校では指導書というのがありますよね。そういったもので、CDなどがついているとか、そういったものも使っていくことになるのではないかと思います。

○長谷川教育長 CDとかそういったものでも対応可能ということですか。

○外国語小委員会委員長 はい。そうだと思います。

○長谷川教育長 わかりました。あとは、逆に、東書の場合、このディス・イズ・ミーから始まっているのですが、東書以外の教科書は、プレレッスンとかということで、導入のところは結構使われているのですよね。例えば、アルファベットの確認とか、クラスルームで使われる英会話のようなものです。逆に、東書だけがないというのは大丈夫なのかなと。ほかのところは、せつかく、導入のところを使っているのですけれども、東書さんは、そこはないけれども、逆に、ほかのところ何かカバーしているのかどうか、その辺をちょっと教えていただければと思います。

○外国語小委員会委員長 東書については、例えば、8ページに「学び方みいつけた！」の1がありまして、単元として独立させている出版社もあるのですが、ここに3・4年生の外国語活動でどんな英語を言えたかなというページがありますので、それが3・4年生との学びの連続性を考えているページなのかなという

ふうにあります。

○長谷川教育長 改めて単元、まとめレッスンのようなことになっていなくても、その合間合間でそういったところが入ってくれば、学習ということでは特に問題ないと考えていいと。

○外国語小委員会委員長 そうですね。英語の場合は、特に、繰り返し、スパイラルのように学んでいくということがありますから、いろいろなところで出てくる部分もありますので、特に単元として設けなくても可能なのかなと感じます。

○長谷川教育長 わかりました。ありがとうございます。
ほかにはいかがでしょうか。

○佐藤委員 各者の内容的なレベルといいましようか、いわば、子どもたちが見たときに、この授業への取り組みやすさとか水準などに差はあるのでしょうか。それとも、各者同じというふうに考えてよろしいのでしょうか。

○外国語小委員会委員長 内容というか、取り上げる題材でとかですね。そういったものについては、各者それぞれですけれども、共通しているものもありますし、違う部分もあるのですが、その点については、それぞれ一定の基準をクリアしているということはあると思います。

○佐藤委員 例えば、授業の中で、この教科書を使って先生が子どもたちに要求する内容のようなものに、比較的レベルが高いとか、標準的であるとか、そういった差が見られるという話は出ませんでしたか。

○外国語小委員会委員長 それぞれの教科書に、これはこんな工夫をしているのだなというのを学びながら、私たち小委員会が開催されていたかなと思います。

○石井委員 聞くことに関してお聞きしたいのですが、リスニングなのかなと思うのですが、音声面での特徴として、各教科書会社で何か特徴があったらお聞きしたいと思います。あとは、振り返りがしやすい教科書があればお聞きしたいです。

○外国語小委員会委員長 聞くことにつきましては、目的を持って聞きたくな

るような、単に練習のために聞くということではありませんので、そういった言語活動の一環として聞いていくというような、お互いにやりとりをしながら聞くとか、そういったことを大切にしておりますので、そういった部分で、それぞれ構成されているかと思います。

振り返りは、各者それぞれ、いろいろ工夫をしまして、單元ごとにマークがついていて色を塗っていくとか、巻末にキャン・ドゥ・リストということで、学んだ、何々ができるというふうに日本語表記されているものや、基本的な英語の全部リストアップしているようなものとか、それぞれ、各者が振り返りに使えるような工夫はされているかと思います。

○石井委員 わかりました。ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 では、私からお伺いしたいのですけれども、ちょっと重複する部分もあるかもしれないのですが、調査研究の観点A・Bに関して教えていただきたいと思います。

観点Aについては、学習指導要領を踏まえまして採択参考資料、こちらから見た場合、特徴が顕著な教科書がどの教科書だったか、その理由もあわせてお教えいただきたいと思います。

観点Bのほうは、札幌市として設定する調査研究項目ですけれども、この面において、特徴が顕著であったのはどの教科書なのか、その理由とあわせてお教えいただければというふうに思います。

○外国語小委員会委員長 調査研究の観点Aに関しては、英語によるスモールトークなどによる学習意欲を高める工夫が見られた点で東書と三省堂に、それから、北海道とかかわりある内容の取り扱いで教出に顕著な特徴が見られました。

続いて、調査研究の観点Bに関しましては、「話すこと(発表)、話すこと(やり取り)、聞くこと」の領域における課題探究的な学習の取り扱いについて特徴が顕著な教科用図書は、東書、教出、光村の3者です。

理由といたしましては、東書は、各單元において学習の目的となるゴールが設定されるとともに、段階的に英語表現の幅を広げていく構成となっており、教出と光村は、各單元においてイラストや子どもの活動写真とともに学習のゴールと

なる言語活動が明確に設定されていることから、3者とも課題探究的な学習を目指す工夫が見られたことなどです。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

観点Aにおいては、東書、三省堂、教出、観点Bでは、東書、教出、光村ということでありましたけれども、この辺につきまして、皆さんから、ご質問、または、ご意見等がありましたらお願いをいたします。

○阿部委員 私のほうでは、まず、2者を候補として挙げたいというふうを考えておりまして、1者目は東書です。その理由といたしましては、先ほどもちょっとお話しさせていただいたのですけれども、サイズ感が大きいだけでなく、サイズに合わせて文字の大きさも大きく表現しているなというのをすごく印象として思ったのと、構成が、子どもたちに非常にわかりやすい構成をしてくださっているなという印象を非常に受けました。加えて、中学校とのかかわり、関連性のあるセクションも設けていただいているという意味で、1者目が東書さんです。

もう一つの教科書会社は、教出さんなのですけれども、こちらにつきましては、委員長からもお話がありましたように、北海道との、特に札幌とゆかりのある地図やイラストを多く使っていただいています、さっぽろ雪まつりのイラストや大通公園などを取り上げていただいている点から、子どもたちに、なじみのあるところからすんなり英語に入らせていただけるのではないかなという点と、中学とのかかわりについてもセクションとして設けていただいているというような意味合いから、2者を候補として挙げていただければと思いました。

以上です。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

ほかの皆さんはいかがでしょうか。

○石井委員 私も同じで、東京書籍さんと教育出版さんが適しているのではないかなというふうに思いました。

2者とも、学習のゴールが明確になっているところと、特に東京書籍さんは、先ほどおっしゃられたのですけれども、段階ごとにスピーチの原稿を作成していくことができるということで、子どもたちが目的を持って学んでいけるのではないかなというふうに思いました。

また、東京書籍さんの大きな特徴としては、P i c t u r e D i c t i o n a r y というのが、非常に子どもにとっては使いやすいのではないかなというふ

うに思っています。

教育出版さんのほうも、やはり、学習のゴールが明確になっているということで、書くことや聞くことや発表することのバランスがよいのではないかなというふうに思いました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○道尻委員 私のほうでは、東京書籍の教科書が候補としてふさわしいのではないかなというふうに思います。

理由としましては、先ほど委員長からご報告がありました各ポイントにおいて、いずれの面でも顕著な点が見受けられるというところと、あとは、英語表現を段階的に学んでいって、最終的に各種のゴールを完成させていくというような、その流れが非常に工夫がよく見られて、一番適しているのではないかなというふうに思うところです。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○佐藤委員 今までのご意見と同じように、私も東書と教出は残したほうがよいと思います。

東書は、やはり、特に、P i c t u r e D i c t i o n a r yが、子どもたちにとっても非常に役に立つのではないかと思います。

あともう一つ、光村もぜひ残したほうがよいと思います。というのは、光村図書は、一言で言うと、非常にオーソドックスな教科書のつくり方をされていて、指示が大変明確に書かれてあると思います。これは、恐らく先生や子どもたちにとっても授業が進めやすい内容になっているのではないかなというふうに思いますので、やはり、光村も残したらと思います。

○池田委員 私は、東京書籍がよろしいのではないかなというふうに思いました。

やはり、ほかの方たちからも指摘がありましたが、まず、サイズ感が大きくて見やすいということと、実際にこの中に書き込んでいくときに、そういう意味で使いやすいようにできているのではないかと思います。

また、P i c t u r e D i c t i o n a r y、別冊がついているというのも、やはり有用ではないかと思いました。

以上です。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

そうしますと、皆様のご意見、それから委員長のご意見等を踏まえますと、今、東京書籍、教育出版、それから光村図書ということで、この3者が選定候補として挙げられるのではないかと思いますけれども、それでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、英語につきましては、東書、教出、光村の3者の教科書を選定候補とすることとして、8月6日に引き続き審議を行い、1者に決定したいと思います。

島田委員長、ありがとうございました。ご退席いただいて結構です。

それでは次に、算数について審議を行います。

私から、小委員会委員長に確認をさせていただきます。

特定の組織や団体あるいは会社等から、働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたか。

○算数小委員会委員長 ありません。

○長谷川教育長 それでは、算数小委員会委員長から調査研究報告(答申)のご説明をお願いいたします。

○算数小委員会委員長 小学校部会、算数小委員会委員長の庄司です。

今回、調査研究の対象となったのは、新たに文部科学大臣の検定を経た東書、大日本、学図、教出、日文、啓林館の6者、合計58点の教科書であります。

これらの教科用図書について、教育委員会が定めた調査研究の基本方針に基づき、算数小委員会において、公正・中立な立場から具体的な調査研究を進めてまいりました。

まず、調査研究の観点Aであります、北海道教育委員会が作成しました採択参考資料を基礎資料とした調査研究の結果についてご説明いたします。

採択参考資料のインデックスの算数採択参考資料の算数1ページをご覧ください。

この様式1の上段の教科の目標のところにありますように、算数は、学習指導要領によって、日常の事象を数理的に捉え、見通しを持ち、筋道立てて考察する力や、数学的な表現を用いて、事象を簡潔・明瞭・的確にあらわしたり、目的に応じて柔軟にあらわしたりする力の育成が重視されております。

採択参考資料の算数1ページから29ページまでの調査研究結果において、二

つの項目について、特に各教科書の特徴が見られましたのでご説明いたします。

1点目は、発展的な問題についてです。

採択参考資料の算数22ページから23ページの様式4をご覧ください。

中学校の数学につながる発展的な問題のページについて、6年生の取り扱いでは、学図が34ページにわたって掲載しています。

スクリーンをご覧ください。

これは、学図の別冊「中学校へのかけ橋」の27ページになります。

ここでは、札幌市の気温を取り上げ、中学校で学習するマイナスについて、日常生活と関連させ、関心を高める工夫が見られます。

続いて、使用上の配慮等についてです。

少し戻りまして、採択参考資料の算数5ページの様式2の使用上の配慮等をご覧ください。

三つ目の丸印にある使用上の便宜について、特徴が見られましたのでご説明いたします。

スクリーンをご覧ください。

教科書、東書、1年①、12ページです。

1年生の入門期において、直接書き込める分冊があり、ノート指導などが可能になります。分冊は、サイズが大きく、開きやすい工夫もあることから、学校意見、市民意見でも意見が寄せられました。

次に、教出、4年で、93ページです。

2年生以降における单元末の振り返ろうというところでは、典型的な誤答の見られる問題に、図に分けて考えたり、問題を分けて考えたりすることなどを促す「考えるヒント」を掲載し、解決の着眼点をもとに、子どもがみずから考えるための工夫が見られました。

次に、調査研究の観点Bの札幌市として設定する調査研究項目について説明いたします。

答申のインデックスの算数の算2ページをご覧ください。

算数においては、ここにありますとおり、ナンバー1とナンバー2の4項目について調査研究を実施しました。そのうち、2の(1)と2の(3)について、各者の特徴が見られました。ポイントを絞って、ご説明させていただきます。

まず、(1)の課題探究的な学習活動の取り扱いについてご説明いたします。

答申は、3ページ、5ページ、6ページに掲載しております。

スクリーンをご覧ください。

教科書、東書、第1学年、78ページ、13引く9の問題場面では、「どこから9をとろうかな」という子どもの吹き出しから、ブロックのとり方に焦点化した授業展開を構成しています。次のページ以降は、ブロック、言葉、式などがつなが

るよう構成され、論理的に考えることの大切さを1年生から位置づけています。

また、第6学年の分数の掛け算の学習では、図と言葉をつないで説明する学習活動に重点を置くことで、論理的に思考することが可能な構成となっております。

続いて、教出、2年で、2ページです。

遊園地の乗り物に何人乗っているかなという投げかけから、掛け算を見出していく導入を図っています。このように、第2学年以降の全ての単元で、「どんな学習がはじまるかな？」と子どもが課題を持てるような場を構成しております。

また、同じく教出、1年、118ページの12引く9の計算場面ですが、「どうして、12を10と2に分けたのか」という課題から、図やブロック操作、言葉をつないで説明する活動が位置づけられており、低学年から、子どもがみずから課題や疑問を持ち、主体的に解決できるような構成となっております。

教出と東書においては、論理的な思考力を育む上で大切な多面的な視点や数直線や図、式との関連を図る視点、子どもの主体性を引き出す構成などに特徴が見られました。

最後に、2の(3)の「データの活用」領域の取り扱いについてご説明いたします。

答申は、3ページ、9ページ、10ページに掲載しております。

「データの活用」領域は、今回の学習指導要領の改訂で、身の回りの事象をデータから捉え、問題解決に生かす力、データを多面的に把握し、事象を批判的に考察する力の育成を目指して新たに設けられたものです。

統計的な問題解決活動においては、問題、計画、データ収集、分析、結論というような段階から成る統計的探究プロセスと呼ばれるものがあり、今後、このような統計的な問題解決の手法は、さまざまな分野で使われ、他教科の学習にも活用できることが予想されていることから、調査対象といたしました。

今回の調査においては、各者がそれぞれに統計における探究の仕方をあらかず五つのプロセスを位置づけておりました。

スクリーンをご覧ください。

教科書、東書、第6学年、189ページです。

ここでは、円の形で図示することで、統計的探究プロセスの流れを想起できるように工夫されております。この図は、ほかの単元でも繰り返し掲載されており、子どもが学習を通じて統計的な探究のプロセスを意識できる構成となっております。

スクリーンをご覧ください。

こちらは、大日本、1学年の66ページです。

第2学年、10ページにも見られますように、データを扱う学習で、生活科の学習と関連させた問題場面を取り上げ、日常生活とのつながりを意識し、関心を高める構成となっております。

学図、第6学年、194ページをご覧ください。

単元「資料の整理」の最後に、ソフトボール投げの結果を記録した度数分布表について、階級の幅を変えるとどうなるかという問いが示されており、子どもが発展的に考え、思考力を高めていくことが可能な構成となっております。

次に、教出、6年、84ページになります。

「データの見方」では、導入場面において、データ量が少なく比較しやすい資料を扱うことで、関係や傾向を捉えやすくし、単元が進むにつれて異なる題材やあらわし方に触れることで、データを多面的に把握できるよう工夫されております。

また、教出では、第4学年で30ページから統計的な探究のプロセスを位置づけるとともに、新しい疑問を持ったときは、もう一度計画を立ててデータを集めようという吹き出しを入れることで、この探究的なプロセスが繰り返されることの大切さを子どもに意識づけしています。

日文、第6学年、184ページです。

日文では、統計の学習における探究的な学びのサイクルについて、見開き2ページを使って説明するとともに、その後6ページにわたって、それぞれの段階における学び方について、マーカーを用いて子どもにわかりやすく紹介しています。

啓林館、第4学年、「整理のしかた」で、61ページをご覧ください。

教科書を見開きにするすることで、3種類の表を比較してみることを可能にしています。データ量の多さを徐々に整理する過程を見えるようにすることで、表を読み取ることが可能な構成となっております。

「データの活用」領域は、新設されたところでもあり、各者ともに工夫が見られましたが、その中から各者の顕著な特徴についてご説明いたしました。

以上、算数について説明させていただきました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、ただいまのご説明に対しまして、ご質問がありましたらお願いをいたします。

○石井委員 振り返りがしやすく、算数の学習のつまづきを防げるような工夫があったような教科書はありましたか。

○算数小委員会委員長 はい。これまでの学年を振り返ることや、次の新しい単元につなげていくことについては、各者それぞれに工夫が見られました。

例えば、学図は、各学年に、振り返り、つなげようというコーナーを用意して、教科書を見開きの形で授業の板書のように構成することで、子どもがみずから復習に活用できる仕組みのような特徴が見られました。

そのほか、教科書の上巻、下巻の中のところどころに復習にかかわる問題が練習問題として載せられていたり、今お話しした中にもありましたが、単元の前に、これまでの学び、既習をちょっと振り返るようなページを置いて、新しい単元につなげていくということです。

○石井委員 わかりました。ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

○佐藤委員 算数においては、事例から決まりや公式、まとめといったようなものを導いて、そこに収れんさせていくという授業の流れになると思うのですが、各者で、その決まりや公式、まとめの見やすさとか、使いやすさとか、そういったものに何か特徴があるという話は出ましたか。

○算数小委員会委員長 教科書自体の見やすさというような話は、小委員会でも出ておりました。

一つ、サイズが大きい教科書がありますけれども、これは1ページ当たりの文字数が少ないので文字による圧迫感が軽減されるかなというふうに思いましたが、どの教科書も、フォントや使うカラーなどに配慮がされていることが教科書の最初に示されておりましたので、それぞれの教科書で見やすさという部分においては配慮がされていると思いました。

○佐藤委員 特に見やすさに大きな違いがあるとか、そういう話は出なかったのですね。

○算数小委員会委員長 はい。

○佐藤委員 ありがとうございます。

○道尻委員 教科書によっては、内容に子どもが登場して、吹き出しのような形で学習のヒントにもなるような言葉を記載しているようなものも見受けられ

るのですけれども、課題探究的な学習活動ということを考える上で、余りヒントを与えてしまうことによって、一方で明確になる面も、他方、子どもが自分で考えて課題を見つけてというところまで求めていくときに、マイナスになり得る心配もないかなというふうに思うのです。

その辺は、小委員会でも、どこまで課題みたいなものを教科書の中で示していくのかというあたりでの議論があったり、具体的に個々の教科書で話題になったりしたようなことがあれば教えていただきたいと思います。

○算数小委員会委員長 吹き出しの役割は、問題の解決に必要な見通しを持たせるものが多いかと思います。

学級には、さまざまな得意、不得意な子どもたちがおりますので、解決の見通しが持てない場合のきっかけになる吹き出しとか、課題につながるものとか、まとめにつながるものとか、非常に有効なものも各者で見られておりました。

低学年においては、吹き出しが学習を進める際に非常に効果的な場合が特にあるかなというふうに思いますが、一方、吹き出しの言葉がそのままやることの指示になってしまうようでは、子ども自身のみずから考える学習には直結しないといえますか、その言葉そのままを示さないような授業の進め方の工夫が必要になるというような話は、小委員会では出ておりました。

○道尻委員 今回の教科書の中で、この教科書はちょうどよいとか、あるいは、この教科書は書き過ぎだとか、特にそういう具体的な指摘は余りなかったというふうに理解してよろしいでしょうか。

○算数小委員会委員長 先ほどの繰り下がりの引き算で、13引く9というときに、ここの教科書は「どこから9をとろうかな」という吹き出しを使っているのですが、「どこから9をとろうかな」と問うことで、この時間に考える課題が焦点化するといえますか、どこから9をとるかということについては、それぞれの子どもたちが考えていくことになるのですけれども、その課題を焦点化していくときのヒントになる、よい言葉だというふうなイメージは小委員会の中で出ておりました。

○高橋義務教育担当係長 2年生の掛け算の学習の場面がありますが、このように式が出ているのですが、この5掛ける8や2掛ける4は、図で説明すると、どこのことなのかなということで、図とこの子どもの吹き出しの言葉をもとにして、式と図をつなげるというきっかけの吹き出しになっております。

このような吹き出しというのを使っているのが、小委員会の中では、非常に効

果的ではないかという話となっております。

○石井委員 算数で学んだことを、日常生活だったり、そういったふだんの生活の場面で生かしていけるような視点がある教科書がありましたでしょうか。

○算数小委員会委員長 例えば、東書に算数を使ってやってみようという生活と関連させたコーナーのページがあります。このページは、算数で学んだことが生活にどう生きるかということを経験できるチャンスになるページかなというふうに思います。

この活動を通して、進んで生活に算数をつなげてみようという力を育むことにもつながっていくかなというふうに考えます。

○石井委員 東京書籍さんに、特にそういった特徴があったということですか。

○算数小委員会委員長 はい。

○石井委員 わかりました。ありがとうございます。

○阿部委員 初めのほうにご説明のありました発展的な問題ということでは、学図さんが34ページ、取り扱っていただいているということで、ページ数についてお話しいただいたのですけれども、ほかの教科書会社での発展的な問題で、ほかに特徴がありましたら、ぜひ、ページ数というよりも、どういうところがという点で教えていただきたいと思います。

○算数小委員会委員長 授業の時数として発展的な問題をきちっと位置づけて、授業の中で時数をとって発展の問題を扱うことが位置づけられているのが、別冊のある学図だったかと思うのですけれども、そのほかにも、それぞれ発展という言葉ではなくても、おもしろ問題にチャレンジをしようとか、それから、ちょっとコラム的に発展的な視点で捉えられるようなコーナーがページの中で設けられているとか、そんなような扱いになっておりました。

時数で、別冊としてとっているのが、学図さんだったと思います。

○阿部委員 わかりました。

○佐藤委員 それにつけ加えて、例えば、今、学図の別冊のご紹介がありましたけれども、「中学校へのかけ橋」という教材は、これがついていけば、これを授

業の時数の中で扱えるということなのでしょうか。

○算数小委員会委員長 はい。

○池田委員 「データの活用」領域の取り扱いについてです。

今、ご説明を聞いたり、各者の教科書を見ながらご説明いただきましたが、P D A C サイクルというのを理解してもらおうということとか、そもそもデータを扱うとはどういうことなのかということを知ってもらおうというようなことが、各者、今回新しく入ったことの狙いということだと思いののですが、最終的に、そういうデータからどういう結論を導き出すのかという推論とかそういうことも、非常に、ある疑問を持ってデータを収集して、それに対してある結論を推論していくということをこの発達段階といいますか、小学校段階では、大体どのぐらいまでを要求しようとしているのか、どのぐらいまでを到達目標と考えているのかということについて、各者の教科書を見ていただいて何か見えてきたことというのはあるのでしょうか。

○算数小委員会委員長 今回、「データの活用」領域というのは、新たに設けられた領域なのですけれども、現代社会において、やはり、多くの人々がいろいろなデータを手にすることができるようになったこの時代に、正しくデータを読み取ることとか、データそのものを最初から信用しないでちょっと疑って見てみるとか、そういう目というのは、これからの時代はやはり必要になってくることなので、この学習というのは、やはり、低学年では、疑ってかかるというところまでの到達目標はありませんけれども、6年間の中で正しくデータを読み取っていく力をつけていくことは、社会の中で非常に重要なことだというふうな認識を小委員会の中では持っておりました。

○池田委員 ありがとうございます。

○高橋義務教育担当係長 少し補足させていただきますと、先ほどご説明させていただいた統計的問題解決活動ですが、問題、計画、データ収集、分析、結論という一連の流れについて委員長からお話があったのですけれども、特に低学年、3年生ぐらいまでですと、その中のデータの収集や分析というところを大切に扱っていきましようというのが学習指導要領で示されているところです。

これが、学年が上がっていくに従って、6年生になっていったときに、このような流れを学習していけるようになるということと、これが一方向のものではなく、教育出版の6年生になります。結論が出たとしても、新たな質問が出てき

たら、もう一度計画を立ててデータを集めようという、これが行ったり来たりするということも大事にしましょうというのが、今回の学習指導要領で改めて示されたところです。

○池田委員 ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

私からもお伺いしたいのですが、観点A・Bに関する事なので今までご説明いただいた部分と重複するところもあるかと思えますけれども、お教えいただければというふうに思います。

まず、観点Aにつきまして、学習指導要領を踏まえまして採択参考資料、これから見た特徴が顕著な教科書はどの教科書になるか、その理由もあわせてお聞かせいただければと思います。

それから、観点Bですが、こちらは、札幌市として設定する調査研究項目におきまして特徴が顕著であった教科書はどの教科書だったのか、その理由もあわせてお教えいただければと思います。

○算数小委員会委員長 調査研究の観点Aに関して特徴が顕著な教科用図書は、東書、学図、教出の3者です。

理由といたしましては、東書では幼児教育段階からの円滑な接続を意図した入門期の冊子の工夫が、学図では中学校数学への円滑な接続を意図した別冊の工夫が、教出では典型的な誤答の見られる問題に「考えるヒント」を掲載し、子どもがみずから考える工夫がそれぞれに設定されており、いずれも、子どもの発達の段階から適した学び方が可能な構成になっていると考えられるからです。

調査研究の観点Bに関しては、東書、学図、教出の3者です。

理由といたしましては、東書は、子どもの吹き出しから課題を際立たせる工夫や単元の中で学習のつながりを大切にした構成等から、子どもが探究的に学習できる構成となっていること、学図は、データの活用において発展的に考える場面を取り入れることで、論理的思考力を育成することが可能な構成になっていること、教出は、図による表現やブロック操作、言葉をつないで説明する活動等を位置づけることで、低学年から主体的に課題を解決できるような構成や、比較的扱いやすいデータから導入し、一つのデータを多面的に捉えていく学習展開、その後、学習が進むにつれて多様なデータを扱う工夫があることなどがあります。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

観点Aについては、幼児教育とか中学校の数学とのつながり等々の関係から、東書、学図、教出という三つの教科書ということでした。

観点Bにおいても、同じく、東書、学図、教出ということでした。

このことにつきまして、皆様からご質問あるいはご意見等がありましたらお願いをいたします。

○道尻委員 今までのご説明をいろいろと聞かせていただいて、私のほうでは、東京書籍と教育出版の2者が、吹き出し等もそうですけれども、課題を明確にして、子どもさんたちが学習に取り組んでいく、論理的な思考につなげるということが効果的に構成されているのではないかと、特に低学年の方にとってはそういう効果が大きいのではないかと感じられますので、その二つを候補としてはどうかという意見を持っております。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○池田委員 私は、教育出版の教科書がふさわしいのではないかというふうに思いました。

各単元において、やはり、どんな学習が始まるのかというような疑問から常に始めるというようなこと、あるいは、データ活用の取り扱いでも、どのような調べ方をすればよいかというようなことを話し合ったりということが設けられていまして、課題探究的な札幌市の教育に適しているのではないかというふうに思いました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○石井委員 私は、東京書籍さんと教育出版さんがよいのではないかなと思いました。

まず、東京書籍さんの特徴としては、この1年生の別冊がとても使いやすいということで、やはり、1年生のときに算数のノートは使いづらいという声もあるので、こういった別冊があると幼児期からの導入が非常にしやすいのではないかと思いました。

教育出版さんは、先ほど池田委員もおっしゃっていたのですけれども、導入場面において疑問から入るところで課題探究的な学習に合っていると思いますし、データの活用のところでも、初めの導入のほうでは扱うデータを少な目にしておいて、その後、多面的に見ることができるというところで、非常におもしろいなというふうに思いました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○佐藤委員 私は、教育出版と学図を推したいと思います。

まず、学図は、先ほどお話に上がりましたように大判で、私自身が見ていても、非常にめくりやすいというか、全体的に見やすく扱いやすい教科書であるような気がしました。それから、ページの区切りが明確で扱いやすいなという気がしました。あとは、6年の別冊のところ、中学校に向けた課題がまとまってあるという点も、学図が評価できる部分なのではないかというふうに思っています。

それから、教育出版さんに関しては、皆さんがおっしゃるように、非常に丁寧なつくりで、まとめ、決まりも見やすい、内容的な見やすさという形では教出なのかなというふうに思っています。この2者でということです。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○阿部委員 私は、学図さんがよいと思います。

理由といたしましては、佐藤委員からもお話がありましたように、ページの構成が、子どもたちに非常にわかりやすい表現、構成になっていて、課題探究に非常につながりやすいということと、身近な題材、生活の中での1シーンを思い浮かべるようなものをすごく取り上げていただいているというのが印象になっています。

左側に考えたいなあとか、確かめたいなあという、子どもがつつつつぶやきそうな言葉を使って、左で子どもたちに問いかけをして、その後、じゃあ、ここではこういうことをやるんだよというような、子どもの視点に立った教科書のつくり方を非常にしてくださっているなという印象を受けました。

それから、佐藤委員からもお話がありましたように、「中学校へのかけ橋」ということで、6年生に別冊版がついているということで、中学に上がったときも、こういう勉強をするのだよということを予測的に行うことが、やるかどうかは別としても、こういうものがついていることで意欲を湧かせていただけるとよいという点から、学図さんがよいのではないかと思います。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

今、皆さんからいただいたご意見、そして、小委員会委員長のご意見等を踏まえ、東書、学図、教出、この3者が選定の候補として挙げられることになろうかと思えますけれども、それでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、算数につきましては、東書、学図、教出の3者の教科書を選定候補とすることとして、8月6日(火)に引き続き審議を行い、1者を決定いたします。

庄司委員長、ありがとうございました。ご退席いただいて結構です。

それでは、次に、音楽について審議を行います。

私から、小委員会委員長に確認をさせていただきます。

特定の組織や団体あるいは会社等から、働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたか。

○音楽小委員会委員長 ありません。

○長谷川教育長 それでは、音楽小委員会の委員長から調査研究報告(答申)のご説明をお願いいたします。

○音楽小委員会委員長 小学校部会、音楽小委員会委員長の足立です。

今回、調査研究の対象となったのは、教出、教芸の2者、合計12点の教科書です。

これらについて、教育委員会が定めた調査研究の基本方針に基づき、音楽小委員会において、公正・中立な立場から具体的な調査研究を進めてまいりました。

まず、調査研究の観点Aである、北海道教育委員会が作成しました採択参考資料を基礎資料とした調査研究の結果についてご説明いたします。

採択参考資料のインデックスの音楽採択参考資料の音楽2ページをご覧ください。

ここから音楽12ページまで、調査研究結果を示しております。

音楽7ページをご覧ください。

様式4の調査項目①の取り扱われている各領域の教材の数から、A表現の(3)の音楽づくりの分野について特徴が見られました。

教出では、6年間で合計45教材と多く取り上げられており、特に第1学年における取り扱いが多いという特徴が見られました。

スクリーンをご覧ください。

教科書、教出、1年、46ページでは、猫の鳴き声で遊ぼう、また、59ページでは、星の音楽をつくろうなど、子どもが難しさを感じず、楽しみながら音楽づくりの活動に取り組める教材を多く掲載しており、音楽づくりへの抵抗感を持ち

にくくする工夫がなされておりました。

次に、先ほどと同ページの下段、様式4の調査項目④の北海道とかかわりのある内容を取り上げている資料等の数にも特徴が見られました。

教芸、5年、26ページから27ページには、札幌コンサートホールKitaraと札幌交響楽団の演奏の様子が見開きの写真で掲載されております。6年、16ページにも同様に札幌コンサートホールKitaraと札幌交響楽団の演奏の様子が掲載されており、札幌市の全ての小学生が6年生で参加するKitaraファースト・コンサートと関連を図った学習活動が可能な内容となっております。

次に、調査研究の観点Bの札幌市として設定する調査研究項目について説明いたします。

インデックスの音楽の音2ページをご覧ください。

音楽においては、五つの具体的項目について調査研究いたしました。そのうち、1の(2)の国際性を育む学習活動の取り扱い、2の(1)の表現領域における課題探究的な学習の取り扱いについて、各者の特徴が見られましたのでご説明させていただきます。

音5ページをご覧ください。

1の(2)の国際性を育む学習活動の取り扱いについてご説明いたします。

教出については、第3学年で、世界の友達の歌を歌おう、第4学年では、世界に伝わるいろいろなリズムや歌を楽しもうというように、世界各国の歌や楽器の音楽が豊富に掲載され、多様な音楽文化に触れることが可能となっております。

ご覧いただいているのは、5年、40ページ、世界のいろいろな声の表現や楽器の響きを楽しもうというページです。

教芸、2年、58ページをスクリーンのほうでご覧ください。

教芸では、1・2学年において、日本の童歌が体の動かし方や遊び方とともに多くの教材として掲載されており、楽しみながら日本の伝統音楽に親しむことができる構成となっております。

教芸、4年、58ページから59ページを画面のほうでご覧ください。

また、同じく教芸では、3学年においては、和太鼓を教材としたページを掲載するとともに、4学年において、箏の基本的な奏法が詳しく説明されており、伝統的な楽器に挑戦しながら日本の伝統音楽に親しむことができる構成となっております。

この調査研究項目においては、教出では、世界の音楽を多く掲載することで、多様な音楽に触れることができる構成、教芸では、童歌、和楽器など日本の伝統音楽を系統的に取り扱い、国際性を育む素地をつくることを重視しており、2者の特徴が顕著となっております。

次に、インデックスの音楽の音6ページ、2の(1)の表現領域における課題

探究的な学習活動の取り扱いについてご説明いたします。

スクリーンのほうで、教出、2年、72ページから73ページをご覧ください。

教出では、各学年の巻末に「音楽のもと」として、音楽を形づくっている要素についての詳しい説明を掲載するとともに、あわせて、2年生以降では、音楽をあらわすいろいろな言葉を掲載しています。この音楽をあらわすいろいろな言葉は、学年が上がり、子どもの発達の段階に合わせて数が増えていくことも特徴となっております。

教出、4年、38ページをご覧ください。

伝えられてきた歌を楽しもうというところでは、教材に北海道民謡「ソーラン節」を取り上げております。「ソーラン節」を歌うときにぴったりの歌い方を見つけながら、日本の音楽に親しむ学習ですが、どんな声で歌ったらよいか、
「もみじ」と同じ声でよいのかと投げかけることで、子どもの課題意識を生み、「ソーラン節」が歌われていた本来の目的や、この曲が生まれた当時の歌い合わせ方を参考にしながら、ふさわしい声や歌い方について自分たちで見出せるような構成となっております。

教芸、4年、46ページから47ページをご覧ください。

歌唱共通教材である「もみじ」のページですが、見開きで歌詞にあらわされている風景が掲載されているとともに、次のページには、この教材での学習のポイントになる上下のパートの重なり方の違いに焦点を当て、前半部分の追いかける重なり方や、後半部分のハーモニーをつくり出す重なり方が楽譜で色分けされて示されており、子どもが曲の部分の重なり方の違いを意識して、歌わせることができる内容となっております。

以上、答申の概要について説明させていただきました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、各委員からご説明に対しましてご質問があればお願いいたします。

○石井委員 3点ほど質問させていただきます。

まず、観点Aと観点Bに係ることなのですが、観点Bである課題探究的な学習において、子どもたちが主体的に音楽を課題探究的に行うための前提として、まず、観点Aである音楽を味わって聞くことができるようになることであったり、音楽活動の楽しさを体験して音楽に親しむ態度を養うということが必要になってくると思うのです。例えば、音楽が苦手な子が理解できて、わかりやすい表現で、音楽の楽しさだったり、興味・関心の工夫ができる教科書ということで、2者で何か違いがあれば教えていただきたいと思います。

また、音楽については、鍵盤ハーモニカやリコーダーについて、自宅で練習す

るという子も多いと思うのですけれども、自宅で練習する際にどちらの教科書がわかりやすく表現してあるか、何か特徴があればお聞きしたいと思います。

それから、札幌市独自の取り組みとして、Kitaraファースト・コンサートだったり、小学生全員が参加できるわけではないのですが、PMFのリンクアップコンサートなどがありますけれども、そういった取り組みであったり、あとは、札幌市のそういう音楽に関する施設に対して、子どもたちに期待感を持たせたり、親しみが持てるような特色が2者であれば教えていただきたいです。

○音楽小委員会委員長 では、まず1点目の音楽が苦手な子でも音楽を楽しく学習できるというところです。

教科書のつくりとしては、学年にもよりますけれども、例えばイラストであるとか写真というのかなり掲載しておりまして、まず、何か楽しそうだな、歌ってみたい、演奏してみたいという興味・関心を持つ、この紙面は、それぞれ2者ともそんなに違いはないと考えております。

その中で、例えば楽譜の扱い方などは若干差があります。

やはり、苦手な子というのは、楽譜に対する抵抗感というのがあるのではないかと思うのですが、両方とも、1年生の最初のころは楽譜の音符としては学習で使われないのですけれども、教育出版のほうは、二線譜というのが結構早い段階に入ってきているのです。教芸のほうも、後半のほうで入ってくるのですが、教出のほうは、そういう楽譜が少し先行して入ってきて、その二線譜があると何がよいかというと、音の高さを視覚的に見ることができるのです。五線まではいかなくても、上がったたり下がったりということがわかるようになっている、そういう楽譜に対する抵抗感がないのかなというふうなことを感じております。例えば、音符の中に階名が書いてあるのは、2者とも同じですが、その扱いの時期が少し変わってきているというところが違うと思っています。

2点目の鍵盤ハーモニカ、リコーダーの件ですが、鍵盤ハーモニカについては、1年生の初めて使う楽器ということで、そんなに導入に差はなかったのですが、リコーダーの場合はちょっと問題となるのが、最初は片手でやるのですが、だんだん右手も入れて、低い音の演奏の仕方というのが、やはり、子どもにとってはなかなか難しいところであるのです。そこが、例えば、教育出版のほうでは、まず、低い音の出し方は我々指導者としてもすごく気を使うところであるのですが、右下のほうに、ファ、ミ、レ、右手の指を使ったかなり低音に近い音は、ゆったりとした息で優しく吹こうということで、息のスピードとか優しさということによって出しやすいですよというような投げかけがされています。

一方、教芸のほうは、少し図が入っていて、例えば、これでいきますと、ホースを息の使い方とかタンギングの使い方に見立てて、高い音と低い音に、左側が

低い音で右側が高い音というふうに見るのですが、少しトーというようなタンギングをすることによって、低い音が出しやすいよということであれば、例えば、家で見ても、そういう生活経験とつなげながら楽器の練習をしていくということも可能な内容の紙面構成になっております。

それから、3点目ですが、札幌の特色は、やはり、6年生が全員、Kitaraで札幌交響楽団を聞くということは、音楽にとっては、大変すばらしい学習内容というふうに考えております。

その中で、「教育芸術社」のほうは、Kitaraファースト・コンサートの写真とか、札幌交響楽団の写真が掲載されているのですが、決して、そうでなければ困るということはないというふうに考えております。これは、小委員会の中でも出ているのですが、興味・関心を喚起するということでは、自分の身近なホールということで期待を持たせるということがあるのですが、どちらの教科書につきましても、オーケストラの鑑賞の学習はきちんと掲載されていて、音の重なり方とか、響き方のよさを感じるような体験をして、学習につながっていくという構成になっています。

その中で、2者の若干の違いとしては、教育出版のほうは、オーケストラの配置が、5年生で、これはこの教科書の特徴であるのですが、透明シートがあって、重ねることによって、どこの楽器がどこにあるかというのが見えるような工夫がされております。これは、ごちゃっと集まっている中で、子どもたちも興味を持ってオーケストラの配置を見ることができるということでは、少しよさがあるのかなと思っています。

一方、教芸のほうは、この楽器の編成を、学年を追って、例えば3年生では金管楽器、4年生では木管楽器、そして、5年生では弦楽器というふうに楽器群ごとに学習をしていって、それが積み重なったところで、6年生で、自然に全部のオーケストラが出てくるというような構成になっているので、それぞれ鑑賞の学習のページはあるのですけれども、その構成の仕方については、違いがあると小委員会の中では見ておりました。

以上です。

○石井委員 ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

○池田委員 今日的な音楽と申しますか、ポップスと呼ばれるような音楽の扱いについて、ざっと見ると、教育出版のほう若干多いような気はするのですが、そういう見方でよろしいのでしょうか。

○音楽小委員会委員長 教育出版の6年生に「ラブソディーインブルー」が掲載されていて、こちらが、まさに比較的新しい、クラシックではあるのですが、新しい音楽でジャズとクラシックの融合ということで、これが扱われて、楽譜も出たり、それから、こういう枠に、ちょっと違うそういう音楽もあるんだよということであれば、そういうところが現代的なものとして扱われているかなと思っています。

全体を通して、教育出版のほうが外国の曲が多いのかなというふうに、数的に例えば歌も14曲掲載されていて、これが教芸でありますと、3年生以上に1曲ずつであって、鑑賞というような扱いでいけば、そういう外国のものがちょっと多いかなというふうになっています。それは、多様な音楽に親しむということでは、それはその価値があることかなと考えております。

一方で、教芸のほうは、どちらかというと、日本の伝統的な音楽のほうに重点を置いたようなつくりになっているというふうに小委員会の中で見ておりました。

○池田委員 ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにはいかがですか。

○道尻委員 どちらの教科書も、4年生の教科書の中で「もみじ」という題材を使っていますけれども、両者において、その取り上げ方や学習の深め方についての違いがあるかどうか、さらに、どちらのほうがより教育的に効果が高い、適切だというような評価に、もし小委員会で意見があったら教えていただきたいと思っています。

○音楽小委員会委員長 課題探究的な学習とやはり大きくかかわってくる部分というふうに小委員会の中で出ておりました。

「もみじ」は、歌唱共通教材ですので、全ての教科書に掲載されている曲ではあるのですが、やはり、今おっしゃられたように、扱いはちょっと違うなということ意見の中で出ておりました。

具体的に言いますと、これは「もみじ」の見開きのページですが、右側に1番と2番の歌詞について、まず1点、記載されていることです。それから、2点目が、上のパートの旋律は下のパートとどのようにかかわっているかなということになっているのですが、この「もみじ」という曲なのですが、楽譜をちょっと見ていただきますと、1段目、2段目が追いかけてこになって、旋律、対旋律が下

のほうに出てきているのです。3段目になりますと、それが、同じリズムで和音で重なって一緒に動いているという、それが、一番最後の4段目になると、ちょっと対旋律のようになって、最後は、また和音になって重なるということで、曲の中でも二つの旋律の扱い方がちょっと違う場面があって、教出のほうは、それを子どもに見つけさせるということを学習として重視されて、もちろん、その後で歌って、いろいろなことを楽しむということがあります。

一方、教芸のほうは、同じ「もみじ」の楽譜ですが、下のほうをご覧くださいと思うのですが、要するに、1段目、2段目の旋律はこうなっていますよ、追いかけていますよということが既に示されている。そして、右側のほうの隣のページには、この3段目が重なっていますよというところが示されています。

この二つのことが小委員会で話題になりまして、課題探究的な最初の学習の入り口として、子どもの一人一人が、興味・関心、それから疑問などを自分が持って学習するというのも、一つ、大事ということを考えれば、先ほどの教育出版のほうは、そういうところが示されていないので、子どもたちが学習の中で、その曲の特徴をそれぞれの子どもたちの言い方、聞き方によって変える学習が可能になっている。逆に、教芸のほうは、示されているのですが、その先が書かれておまして、では、それをどんなふうに歌ったらよいのかな、1段目、2段目、3段目はということで、それが、実際に演奏してみて、子どもたちが実感できるというところで構成されています。これは、この曲だけではなくて、例えば、同じ学年の「とんび」とか、ほかの曲でもこういう傾向というのが見られております。

我々指導者は、課題探究的ということで、45分の授業をやる中で、どこも大事な部分ですので、その扱いは教科書に示されておりますけれども、重点の置き方というところに差異が見られると思います。

○道尻委員 よくわかりました。

○阿部委員 答申の3の(1)のところでは、人間性や社会性を育むという項目になっていると思うのですが、ここでは、特に、例えば、児童同士のコミュニケーションだったり、音楽ですので、家庭の中でもBGM風に音楽は耳に入ってきたりという意味では、非常に項目としても重要なポイントかなと思うのですが、それぞれの教科書会社で、特徴だったり、工夫がありましたら、あえてちょっと教えていただきたいと思います。

○音楽小委員会委員長 音楽というのは、音楽とか音を通して子ども同士もかかわったり、それから、音楽文化とかかわったり、それから、将来的には中学校

に向けては、それが音楽文化として私たちの中に生きて、その良さというようなことを学ばせたいという願いがありまして、教科書のほうは、両者とも低学年のころからお互いにかかわって、例えば2人で活動する、低学年であれば童歌と一緒に歌ったり、それから、高学年になるとグループで演奏するようなこともあるのですが、話し合いを組織的に行われるというのは、両方の教科書に掲載されております。

例えば、最後の6年生の学習の中では、「ふるさと」が共通教材としてあるのですが、これが教出のほうのページになります。イラストがあって、楽譜があるのですが、次のページを開きますと、これは、下のほうに、曲に対する思いとかそういうことを、作者がどういう思いを持ってつくっているかということを感じるということで、やはり、他者の考え方とか作曲家のところに思いをはせながら歌詞を読んだり、つくられたことの時代背景を見ながら音楽表現をつくろうというような構成が特徴になっております。

一方、教芸のほうは、こちらと同じように楽譜とイラストがあるのですが、こちらのほうが、次のページ、4ページ立てになっておりまして、このところで、子ども同士が学習の中でお互いにどんなふうに歌ったらよいのかなとか、これはどんな内容をあらわしているのかなということ、こういう話し合いの中で行っていく。そこで、同じように作曲者や作詞者の思いが込められている部分をお互いに出し合うということ、同じ歌を歌うにしても、それぞれお互いに意見を交わしながら、コミュニケーションを持って音楽をつくっていくということが書かれています。そして、下のほうでは、発展的に、それがさらに「ふるさと」という曲について広く歌われているというところから、いろいろな方にインタビューしてみようということでは、これもまた大切なコミュニケーションの練習ではないかと小委員会の中では話し合われました。

○阿部委員 そうすると、2者において、そんなに大きな差があるというわけではなさそうですかね。

○音楽小委員会委員長 はい。

○阿部委員 わかりました。

○長谷川教育長 今のこととちょっと関連するのですが、教芸の6年生、53ページに、卒業を迎える時期に思いを伝えようということで、卒業に思いを込めてというページがあるのですが、どういった気持ちで歌うのかとか、どういった気持ちを込めるのかとかというのをわざわざ白抜きで、こういった工夫というの

は、教育出版のほうにはあるのでしょうか。

○音楽小委員会委員長 卒業に関するこういう記載は、ここだけになります。

こういうワークシートは、両者とも使われているのですけれども、その扱いは、若干、やはり違うところがいろいろなところで見られますが、この教芸のほうでは、音楽を学習する中のワークシートの記入として、例えば、感じたことと聞いたことが分けられて記載するようなことになっている、あるいは、教出のほうは、音楽の流れの中で、全体を通して聞くということになっております。そういうような記入するページが両者ともあります。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

○石井委員 表現領域における課題探究的な学習の取り扱いについてお聞きしたいのですが、音楽づくりというのが一つあると思うのです。

両者の中で、音楽が苦手な子だったり、発達の段階において作りやすくというか、どういうふうに音楽をつくったらよいのかという、子どもたちにとってわかりやすく提示してくださっているような工夫などがあったら教えてください。

○音楽小委員会委員長 音楽づくりのほうは、まず、教出のほうは、例えば音楽、最終的に6年生でアドリブのところまで行くような構成になっております。やはり、アドリブというのは難しいので、そこにどんなふうに学習を積み重ねることによって、6年生でそういう学習ができるかということが考えられております。

その点、例えば、楽器であるとか、音階であるとかそういうようなことが、各学年に段階的に示されながら、5年生では、ずれを生かした音楽、そして、6年生では、こういう循環コードを使ったアドリブということで、音楽づくりというのは、やはり、ただ楽譜に書いている曲を演奏するものと違って、創作して何かつくるときの自分の学習したことが積み重なっていくということが必要ですので、そういう見方からいくと、教出のほうは、そういう段階的に学年を追ってつくられているということが小委員会の中で出ておりました。

一方、教芸のほうは、1年生から3年生の低学年の中に楽器とか歌だけではなくて、言葉とか、そういう呼びかけ合いとか、そういう身近なものをイメージしたものを大事にして、そういうところで活動をするものがたくさん掲載されておりまして、それが自分の生活の中とつながりながら、何かをつくるというところから、それが、だんだん音から音楽へという段階でいって、そして、あとは、音

も三つから五つ、六つというふうに使われる音が増えていったりということであれば、こちらのほうも、そういうことでは、段階的に発達段階を追った音楽づくりの学習が可能ではないかなと思います。

○石井委員 音楽づくりに関して、全ての教員の方が実施するのは、このアドリブで遊ぶというところまで行き着くのに、非常に高度なのではないかなというふうに思うのですけれども、その点、小委員会で、全ての教員の方が音楽づくりを実施するという点で、何か話し合われたことはありましたでしょうか。

○音楽小委員会委員長 アドリブが大変難しくて、やはり、そういうふうに意見も出るのですけれども、例えば、音楽の場合は、先ほどの「ラプソディーインブルー」などもそうですけれども、今までのものと違って、例えば、いろいろな規則とはちょっと違ったよさみたいなものもある、そんなものも音楽の可能性ですよということが、こちらのアドリブには示されているのかなという話が出ておりました。

どちらの教科書も、音楽づくりの教科書は、前回のものより丁寧に扱われていて、教科書の中に、その手がかりになるものがかかり掲載されてきているなどというふうに感じています。以前ですと、イメージをつかむ部分がすごく多かったのですが、では、どうやってそれを音にするかというところは、やはり教師の力量によるところも多かったのですが、今回は、それぞれの教科書が、この教科書を使って学習ができるような内容となっております。

○長谷川教育長 それは教芸ですか。

○音楽小委員会委員長 そうです。例えば、教芸ですと、やはり、旋律をつくるというのは難しいのですけれども、ちょうど左側の真ん中のあたりに、その旋律を幾つか部位分けをして、上がったたり下がったり、それから、でこぼことか、そういうような形を示すことによって、子どもは、これをもとにしながら、自分で旋律をつくっていくということで、かなり、ある程度、子どもたちが見通しを持って活用できるような紙面構成がなされています。

○石井委員 ありがとうございます。

○佐藤委員 最後に、先ほど道尻委員も触れたところの確認なのですけれども、そうしますと、今の石井委員の表現領域のご質問と道尻委員の鑑賞領域のご質問を総合してこの2者の違いというのを捉えるとすると、いわば、子どもに手が

かりを主体的に見つけさせていくというほうが教育出版の特徴で、教芸のほうは、手がかりをある程度示して、明示して、そこから発展させていくという、そういう特徴の違いがあるというふうに捉えてよろしいでしょうか。

○音楽小委員会委員長 はい。小委員会でも、そのように意見が出ておりました。

○佐藤委員 そうですね。ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 音楽につきましては、対象となる教科書が教出と教芸の2者ですので、これは、2者とも選定の候補として8月6日に引き続き審議を行った上で、1者に絞り込みたいと思いますけれども、それでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 では、そのようにさせていただければと思います。

足立委員長、どうもありがとうございました。

それでは、ここで10分間の休憩をしたいと思います。

再開は、15時32分からといたします。

[休 憩]

○長谷川教育長 それでは、会議を再開いたします。

次は、理科について審議を行います。

私から、小委員会委員長に確認をさせていただきます。

特定の組織や団体あるいは会社等から、働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたか。

○理科小委員会委員長 ありません。

○長谷川教育長 それでは、理科小委員会委員長から調査研究報告(答申)のご説明をお願いいたします。

○理科小委員会委員長 小学校部会、理科小委員会委員長の桜井です。

今回、調査研究の対象となったのは、新たに文部科学大臣の検定を受けた教科書の中から送付されました東書、大日本、学図、教出、信教、啓林館の6者、合計24点の教科書であります。

これらの教科用図書について、教育委員会が定めた調査研究の基本方針に基づき、理科小委員会において、公正・中立な立場から具体的な調査研究を進めてまいりました。

まず、調査研究の観点Aである、北海道教育委員会が作成しました採択参考資料を基礎資料とした調査研究の結果についてご説明いたします。

それでは、インデックスの理科採択参考資料の理科1ページをご覧ください。

この様式1の上段、教科の目標にありますように、理科については、学習指導要領において、特に、自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しを持って観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力の育成を目指すことが重視されております。

採択参考資料では、理科2ページから理科24ページまで、調査研究結果を示しております。

そのうち、二つの項目について、各者の特徴が見られました。

一つ目は、理科4ページから理科14ページの様式2の使用上の配慮等の1番目に示されております児童の学習意欲を高める工夫についてです。

教科書、東書、3年、149ページです。

東書は、コラム「理科のひろば」を全学年に盛り込んでおります。例えば、画面のように、磁石の性質が社会に生かされている事例を紹介するなど、理科と実際の社会や生活との関連を強調しております。

また、「理科のひろば」の前のページには、「学びを生かして深めよう」のコーナーを設け、例えば、身の回りから磁石を利用したものを探す活動を促すなど、自然事象を日常生活に当てはめて、さらに学びを深め、学習意欲を高めることが可能な構成となっております。

教出、3年、188ページです。

教出は、コラム「科学のまど」を全学年に盛り込んでおります。例えば、画面のように、海で航海する船が方位磁針を使用している事例を紹介するなど、理科を学ぶ意義を実感できるようにしております。

また、「科学のまど」のコラムとあわせて、前のページには、チャレンジのコーナーを設け、例えば、磁石の性質を使って実際に方位磁針をつくる活動を促すなど、実際の活動と資料をつなげることで、自然事象を日常生活に当てはめ、学

習意欲を高めることが可能な内容となっております。

二つ目は、採択参考資料理科16ページから理科17ページの様式4の調査項目⑤の北海道とかかわりのある内容を取り上げている箇所数についてです。

3年生から6年生を合わせますと、東書が35カ所、教出が63カ所、啓林館が32カ所と、この3者において多くの取り扱いが見られました。

東書、4年、17ページ及び啓林館、4年、17ページです。

東書「理科のひろば」及び啓林館「つなげよう」において、札幌市を含む全国の都市の季節による植物の変化について観察を促しています。

北海道とのかかわりのある内容を季節に合わせて継続して取り上げることで、ふるさと札幌を心に持つ学びにつながる内容となっております。

次に、調査研究の観点Bの札幌市として設定する調査研究項目について説明いたします。

答申のインデックスの理科の理2ページをご覧ください。

理科においては、ここにありますとおり、ナンバー1からナンバー3までの6項目について調査研究を実施いたしました。そのうち、2の(1)の課題探究的な学習活動の取り扱い、3の(2)の自然災害の取り扱いについては、各者の特徴が見られましたのでご説明させていただきます。

まず、2の(1)の課題探究的な学習活動の取り扱いについてご説明いたします。

答申のインデックスの理科の理5ページから理6ページをご覧ください。

ここでは、理科の見方・考え方を働かせ、見通しを持って観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決することと関連の深い、みずから疑問や課題を持つ学習活動及び結果から考察する学習活動が可能な内容となっているかという観点で調査研究を行いました。

各者とも、課題研究の過程を重視し、予想や仮説をもとにした観察、実験を中心に学習が展開できるような内容となっておりますが、単元の導入及び結果の考察について特徴が見られましたのでご説明いたします。

まず、教科書、東書、5年、158ページをご覧ください。

振り子の1往復する時間を変える要因について、考察しようというところで、各グループの結果をグラフにあらわし、上から三つ目の吹き出しのように、三つの結果を比較しながら、話し合いを通して結果を整理し、考察しており、条件に着目して考えることが可能な内容となっております。

次に、教出、4年、51ページをご覧ください。

単元の冒頭、見つけようというところで、モーターで回るプロペラカーを実際に動かします。児童は、3年生での学習をもとに車が前に進むと考えますが、52ページにおいて、後ろに進む車があることに気づき、乾電池の向きに着目するこ

とで、電気の流れとモーターの回転方法との関係について課題を持っています。見つけようというところで、自然事象のあらわれを観察し、あらわれの違いを比較することで課題を明確にする構成となっています。

次に、大日本、6年、176ページをご覧ください。

電気を効率よく使うプログラムをコンピューターでつくり、プログラムで実際に器具を動かすことによって、電気の使われ方を考えます。

目的に向かって試行錯誤しながらプログラムを入力して器具を動かすことによって、電気の効率的な利用についての課題を探究するとともに、プログラミング的思考を育むことが可能な内容となっています。

同様に、東書、信教、啓林館においても、プログラムをコンピューターでつくり、プログラムで実際に器具を動かすことによって、電気の使われ方を考える構成となっております。

次に、3の(2)の自然災害の取り扱いについてご説明いたします。

答申の理10ページをご覧ください。

ここでは、児童が、自然現象が大きくなると災害が起こることを知り、その被害から身を守る工夫等に関する学習活動を通して自然環境と自然との生活について考えることが可能な内容となっているかを中心に調査しました。

大日本、教出、信教、啓林館の4者においては、5年生及び6年生で、台風や大雨及び地震や火山の噴火に伴う災害について、その被害や対策について掲載し、考える学習活動を構成しております。

東書では、画面のように、5年、88ページから89ページで、見開き2ページにわたって自分たちにできることは何かを考える学習活動をさまざまな写真、グラフなどとともに掲載しております。

学図では、図面のように、5年、118ページで、川の水による災害から自分たちの命を守るために何ができるか、話し合う活動を掲載しております。

東書、学図の2者は、理科で学んだことを生活に生かすことを促す構成となっております。

以上、理科について説明させていただきました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、ただいまのご説明に対しまして質問がありましたらお願いをいたします。

○石井委員 プログラミングに関して、各者で扱い方の違いがあると思うのですけれども、何か特徴があれば教えてください。

○理科小委員会委員長 プログラミングについては、学習指導要領において、算数及び理科について内容が示されております。

プログラミング教育の教育課程の位置づけは、学校の判断となりますが、教科の狙いに迫るプログラミングの学習活動は重要と考えます。

その意味におきまして、各者ともプログラミング教育を取り上げておりますが、プログラミングに関する各者の取り扱いの傾向は、大きく三つに分類できるのではないかと思います。

それでは、実際にプログラミングを行い、センサーなどで出力し、電気の利用について考えることが可能な教科書として、画面にありますとおり、東書をご覧ください。

ここでは、自分たちが、電気の利用と有効活用ということで、人が近づくと明かりが付き、しばらくすると消えるプログラムをつくる、そういう活動を通してプログラミングを学ぶ構成になっております。実際に、活動を通してプログラミング的思考を学ぶということが可能な構成になっております。

続いて、啓林館におきましても、コンピューターを使ったプログラミングの例が画面に出ております。

この場合におきましては、それぞれのフローチャートのような形で、始め、そして、次のプログラミング、それが、「はい」か「いいえ」かで次につながっていく。このような一つ一つのプログラミングの思考の途中過程を大切にした構成でプログラミングを学ぶ構成になっております。

ほかの各者についても、当然、可能な形にはなっておりますが、例えば、専用ソフトを用いてプログラミングを行い、画面上で制御を学ぶことができる教科書としては学図、プログラミングを紹介し、興味や関心を引き出すことが可能な教科書としては教出など、各者の特徴が見られております。

以上です。

○石井委員 ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにいかがでしょうか。

○池田委員 課題探究的な学習活動に関連して、それぞれの教科書で各単元の最初の問いかけや、それに続く展開など、そういうことに何か特徴はあったでしょうか。

各單元ごとのつくりとといいますか、項目立てみたいなことについてです。

○理科小委員会委員長 まず、課題探究的な学習ですけれども、理科における

課題探究的な学習については、児童が、これまでの学習や経験を当てはめて、自然事象に働きかけたときのあらわれに対して、気づきや疑問を持ち、それらを他者と比較し、共有することで課題に高めることが重要と考えます。

そこで、東書、4年、40ページをご覧ください。

東書の教科書は、問題をつかもうというところで、3ページにわたって、3年生で回路をつくった経験をもとに乾電池とモーターをつなぎ、回転方向のあらわれの違いについて複数の児童で比較しながら話し合い、乾電池の向きと回転方向に対する課題を児童みずから持つことにつなげております。還元の導入が、子どもたちの活動のその後の充実につながっているものと考えます。

教育出版、4年、51ページをご覧ください。

教出版の教科書は、見つけようというところで、3年生で学んだ回路に対する考えをもとに、乾電池とモーターをつなぎ、回転方向について複数の児童であらわれを比較して、乾電池の向きと回転方向に対する課題を児童みずから持つことにつなげております。

単元構成全体でお話ししますと、自然事象に子どもみずから働きかけ、その後の子どもの活動が主体的になるように、そういう構成がこの2者には特徴としてあらわれております。

以上です。

○池田委員 ありがとうございます。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

○佐藤委員 理科の教科書を大まかに捉えると、まず、問題を設定して、それから計画を立てて実験して、結果からまとめをするという流れに各単元がほぼなっていると思うのですが、そのとき、各者は、恐らく実験をして結果を出すというところまではほとんど変わらないというか、同じような形で、そこまでの実験の手続などを非常に詳しくやっているところもあれば、図示しているところもあるというような捉えでよいと思うのですが、恐らく、一番重要なポイントというのは、得られた結果、算数でも出ていましたけれども、データという事実を一般化、抽象化してまとめるわけですね、つまり、その結果からまとめのプロセスというのが、恐らく、授業においても、教科書においても結構ポイントになってくるのではないかといつも私は考えているのですよね。

そのこの部分の、言ってみれば、事実から一般化するときに、論理的には隔たりとか飛躍というものがそこにはおのずと生じてくるわけですが、それを埋めていく説明とか理由とか背景みたいなものをよりよくフォローしている教科

書、それぞれの各者の特徴があれば、すなわち、幾つかの教科書で見ると、結果から考えようという部分が、そのつなぎに当たるのだらうと思うのですが、その結果から考えようの部分の内容について、各者にもし特徴があれば教えていただきたいと思います。

○理科小委員会委員長 そのとおり、理科における課題探究的な学習については、結果を整理すること、及び、その結果を見通しや他者のあらわれと比較して考察することが重要です。

東書、5年、158ページをご覧ください。

東書の教科書は、考察しようというところで、振り子の周期を変える要因について複数のグループの結果をグラフに整理して、三つのグラフを比較して児童の考えを話し合うことで、条件に着目した考察となっています。

それぞれの実験結果もちろん重要ではありますが、三つの結果かつ複数のグループの結果をグラフにして整理することで、結果から子どもたちの考察がより深まる、そのような構成が可能になっております。

教出、5年、110ページをご覧ください。

教出の教科書は、結果から考えようというところで、振り子の周期を変える要因について、一つ一つの実験結果をグラフに整理し、見通しとあらわれを比較し、児童の考えを話し合うことで考察するようになっております。

どちらも結果から考察をしております。

東書については、先ほどお話しましたように、三つの結果、複数のグループをその結果から考察をします。教出については、一つ一つの実験結果を整理し、その見通しとあらわれを比較しながら児童の話し合いを促す構成、こういう特徴があります。

どちらも、結果から考察するということが十分に可能な構成となっていると考えます。

○佐藤委員 ありがとうございます。

○阿部委員 理科の場合は、全てを実験という形で視覚化するのはすごく難しい部分もあると思うのですが、そういった意味では、教科書の取り扱いの仕方として、例えば、写真の扱い方だったり、イラストの扱い方とか、そういったところに、もしも特徴がある教科書会社がありましたら教えていただきたいというのが、まず1点です。

先ほどもご説明いただいたのですが、自然災害の取り扱いというところで、北海道ならではの災害との関連性ということで、子どもたちが災害を主体的

に学ぶきっかけづくりについて、特に工夫をされている教科書会社がありましたらということで、この2点についてお伺いできればと思います。

○理科小委員会委員長 実際には、実験、観察ができないものにつきましては、当然、そのようなものを取り扱っておりますし、今回の教科書会社におきましては、QRコード等を利用して、そこからアクセスして、さまざまな資料を提示ということにつながっているところもあります。

写真につきましては、やはり、単元の導入時の観察、実験に導く役割や、実際に観察できない事象を捉える役割がありまして、その一つの例として、東書、3年、94ページと96ページをご覧ください。

これは、実際にやっているところでありまして、写真やイラストの伝え方として、子どもたちのひなたと日陰の地面の温度の違いを体感して、その違いを明らかにするための吹き出しとイラスト等で構成しているところで、これが一つです。

それから、実際は、教出の札幌の雪の様子、4年生の教科書をご覧ください。

これは、札幌市の時計台のつららの様子から課題を見出す構成になっております。

札幌の特徴として、もちろん冬があるのですけれども、そのようなときに、実際に最近の生活においては、つららのものというのが、なかなか日常生活にはない、その中の顕著な例として、ここから課題を見出すような構成になっております。

災害につきましては、東書、6年、126ページをご覧ください。

これにつきましても、災害そのものと、今お話がありましたイラスト等と兼ね合わせた扱いになっております。

自分たちが住んでいる地域で大きな地震や火山の噴火が起きたとき、どのような災害が起きるかということを利用して課題解決に結びつけているような流れになっております。

先ほどもお話がありましたが、災害の扱いにつきましては、各者の特徴がよくあらわれておりまして、先ほどの説明にもありました大日本、教出、信教、啓林館の4者においては、5年生及び6年生での台風、大雨及び地震や火山に伴う災害についての実際の写真欄を扱ったものになっておりますし、身近な生活につなげるような構成というのが、東書におきましては、先ほどもお話ししましたように、見開き2ページで、どのように自分たちの生活につながっているか、自分たちにできることは何かを考えるような活動を行うような構成になっております。

それが、災害に対する顕著な例だと考えております。

○阿部委員 追加で質問をよろしいですか。

先ほど冒頭で、URLやQRコードのことに少し触れていただいたと思うのですが、教出と啓林館においては、他の教科書会社よりも、非常にQR、URLを用いて発展的な探究心を持たせてくださっているのではないかなというふうにちょっと感じるところがあるのですが、その辺について、小委員会で何かお話が出たりしていましたらお願いいたします。

○理科小委員会委員長 これも、小委員会の中でも各者の特徴が非常に出ているなということで話題になったところです。

まず、先ほどのお話に出ましたように、観察、実験を補うものとして、このQRコード、それから、先ほど出ました写真、イラスト等は有効な手だてです。

そこで、東書におきましては、巻末にQRコードを掲載して、特設サイトに接続できるようにしており、その特設サイトでは、植物や動物の様子など、それぞれの学年での学びを深める内容が掲載されております。

教出におきましても、特設サイトを設置し、学習内容を深める内容、実験器具の使い方などを深めることができるようにQRコードを掲載しております。

啓林館におきましても、QRコードを多数掲載し、画像の内容をさらに深められるよう、中には、NHKのビデオ的なスクールにつながるものも掲載しております。

こういうことが特徴として考えられます。

○阿部委員 このQRコードについては、例えば、自宅学習などにおいても、子どもたちにとって、授業中にはできなかったことをお家に持ち帰って、お家の例えばスマートフォンとかそういうものを使った予習、復習などにも関連性はありますでしょうか。

○理科小委員会委員長 予習、復習ももちろんそうですが、子どもたちの興味・関心に応じて、興味・関心を持った子が、さらにそこから応用・発展的な学習につながるということが十分予想されますし、事前に興味・関心が高いお子さんにおきましては、QRコードを用いた事前資料を学ぶという機会にもつながっていくと考えております。

○阿部委員 ありがとうございます。

○道尻委員 東京書籍のこの教科書のサイズなのですが、この会社だけがA4サイズで、ほかの教科と比べても大きいかなというふうに思われますし、

学校意見でも、A4サイズが大き過ぎるとか、持ち運びに難があるのではないかなという意見が出ているようですが、この点、小委員会のほうで何か検討されたことがあるか、あるいは、委員長のお考えとして、この点を考慮する必要があるのかどうかを教えてくださいたいと思います。

○理科小委員会委員長 これも小委員会の中で非常に話題になったところです。

ご指摘のとおり、東書のみ、サイズが違っております。

理科の教科書のページ増と大型化につきましては、内容を見ていけば、私たちもわかったのですが、内容の資料の充実と画像の効果的な掲載というのですか。同じ写真を扱うにしても、見やすい形で大きく広げた結果、大きな判になったり、その結果、ページ数が増えたりと、内容を充実するためにページ増と大型化というふうにつながっているのではないかと考えます。

実際のところ、現在、札幌市で使用しております教出の6年生は、461グラムの教科書を使用しております。今お手元にありますのは、東書が524グラム、大日本が465グラム、学図が543グラム、教出が528グラム、信教が431グラム、啓林館が494グラムとなっており、各者が紙の軽量化等を図り、若干増えているところもありますが、そんなに大幅な増とはなっておりません。ただ、ご指摘のとおり、内容を充実するということで、ページ増と大型化になっておりますが、これは使用する上で決して弊害になるものではなく、学びの深まりにつながるものと考えます。

○道尻委員 わかりました。

○長谷川教育長 今のことに関連してなのですが、東京書籍の3年生の1ページ目というのでしょうか、見開きのところなのですが、3年生ですから、導入の部分になるのかと思うのですけれども、子どもたちの興味・関心が本当にスムーズに理科の教科書に入っていけるというようなところで、東京書籍さんは、何でということ、写真を大きく使って興味・関心を引かれていると思うのですけれども、3年生は初めての理科ということで、それぞれの教科書会社が工夫されているところとか、顕著なところは何かありましたでしょうか。

○理科小委員会委員長 ご指摘の東書におきましては、今、話題になった写真の大きさ、これは原寸大のものなのです。それを扱ったり、ぐっと拡大して、子どもたちの興味を引いたり、あるいは、写真の連続性から、さまざまな物事の連続性に気づかせていくような特徴になっているのが一つあります。

教出におきましては、ここでは、じっくりと見るということ、この特徴、こ

こから子どもたちが課題を持って取り組むような、興味・関心を持てるような構成になっております。

各者とも工夫しておりますが、各者においては、写真の素材の取り上げ方、それから、大きさ、連続性、あとは、冒頭でも説明しましたが、札幌市と比較した全国各都市の季節の流れにおきましても、効果的に系列的に並べて、比較を見やすくしているというような特徴が、先ほどの東書等にはあります。

そのようなところが、各者の写真の取り上げとしては、小委員会で話題になったところですよ。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、また重複する部分もあるのですけれども、観点A・Bに分けて、それぞれ顕著な特徴があった教科書会社についてお教えいただきたいのですが、まず、観点Aにつきましても、学習指導要領を踏まえました採択参考資料から見た場合に特徴が顕著な教科書はどの教科書か、その理由とあわせてお伺いしたいと思います。

また、観点Bについては、札幌市として設定する調査研究項目におきまして特徴が顕著であったのはどの教科書なのか、その理由もあわせてお聞かせいただければと思います。

○理科小委員会委員長 調査研究の観点Aに関しましては、特徴が顕著な教科用図書は、東書、教出、啓林館の3者です。

理由といたしましては、東書、教出では、理科を学ぶ意義を実感できるコラムを設定し、学びを日常生活に当てはめる、さらに学習意欲を高める構成となっております。

また、東書、啓林館では、札幌の四季による植物の様子の変化を1年間継続して観察する構成となっております。

3者とも、本市の児童が理科に対して興味・関心を持って学習するための工夫が見られると考えるからです。

続いて、調査研究の観点Bに関しては、東書、教出の2者です。

理由といたしましては、2者とも、児童が観察、実験における疑問や気づきについて話し合うことを通して、課題を持ち、結果を考察する学習活動が構成されており、理科の見方、考え方を働かせた課題探究的な学習がより可能な内容とな

っていくと考えるからです。

以上です。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

観点Aについては、コラム設定のある東書と教出、そして、札幌の四季による植物の様子の変化、こういったものを取り上げている東書、啓林館ということで、観点Aは、東書、教出、啓林館、観点Bについては、課題探究的な学習がより可能になっている工夫があるということで、東書、教出ということでよろしかったでしょうか。

○理科小委員会委員長 はい。

○長谷川教育長 それでは、今、委員長からありました意見を踏まえまして、ご質問、ご意見等をお願いしたいと思います。

○池田委員 私は、今のご説明も踏まえまして、教育出版と東京書籍の教科書が、課題探究的な面からふさわしいのではないかというふうに思いました。

教育出版のほうが、全体的に問いや記載がややきめ細かく、文字なども若干多いような印象です。それに対して、東京書籍は、圧倒的に判も大きいこともありますけれども、見やすいと。逆に、判が大きい割に説明や記載はそんなに多くなくて、とにかく見やすいのは東京書籍、記載のきめ細やかさでは教育出版という印象を持っています。

以上です。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

○道尻委員 私も、池田委員がおっしゃったのと同様に、教育出版と東京書籍、この2者を候補とするのが適切だと思います。

理由については、今おっしゃられたことと同じですので、改めて述べることは省略させていただきます。

○長谷川教育長 わかりました。ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

○佐藤委員 私も、東京書籍、教出でよいと思うのですが、やはり、それ

に加えて、啓林館も残したいなど。その理由は、各者で見比べますと、この啓林館の教科書は、開いたときに非常に見やすいと私は思うのです。

それから、各者、もちろん、問題、計画、実験、結果、まとめは同じなのですが、そのこの区分けも、やはり、啓林館が一番見やすく、整理されているような気がするので、これもぜひ残しておいていただきたいと思います。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○阿部委員 私も佐藤委員と同じなのですが、東書、教出、啓林館の3者です。

理由としましては、皆さんからも上がっておりますように、3者とも、結果から考察する力という意味におきましては、非常に工夫をされながらやっていらっしゃるなという印象を受けました。

もう一つの理由といたしましては、先ほど質問させていただきましたように、QRコードとURLをこの3者は特に多く取り扱っていて、答申にもありますように、科学的リテラシーという意味でも、例えば自宅での学習にもつながる可能性があるというお話だったのと、今の子どもたちは、動画への進みというのは、ある一定、持っていると思うので、そういうことを考えますと、3者が適切ではないかなというふうに判断いたしました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○石井委員 私も、東書と教出と啓林館の3者を残したいなというふうに思います。

東書と教出に関しては、ほかの委員と同じ意見なのですが、啓林館については、プログラミングに関して、実際に行う実験、プラス、シートやシールを使ってアナログな方法でプログラミングを学ぶというところが、本当におもしろいと思います。そういった、実際に実験ではなく、アナログな方法で論理的な思考力を身につけるのにとっても役立つのではないかなというふうに思いました。

以上です。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、理科につきましては、東書と教出、それから啓林館、この3者の教科書につきまして、選定の候補とすることよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、この3者を選定の候補とすることといたしまして、8月6日に引き続き審議を行いまして、1者に絞り込みたいというふうに思います。

それでは、桜井委員長、どうもありがとうございました。

それでは、最後になりますけれども、社会につきまして審議を行います。

私から、小委員会委員長に確認をさせていただきます。

特定の組織や団体あるいは会社等から働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたか。

○社会小委員会委員長 ありません。

○長谷川教育長 それでは、社会小委員会委員長から、社会と地図がありますけれども、社会の調査研究報告答申の説明をお願いいたします。

○社会小委員会委員長 小学校部会社会小委員会委員長の附田です。

今回、社会において調査研究の対象となったのは、東書、教出、日文の3者、合計14点の教科書であります。これらの教科用図書について、教育委員会が定めた調査研究の基本方針に基づき、社会科小委員会において公正・中立な立場から具体的な調査研究を進めてまいりました。

まず、調査研究の観点Aである北海道教育委員会が作成しました採択参考資料を基礎資料とした調査研究の結果についてご説明いたします。

採択参考資料のインデックスの社会の3、採択参考資料の社会の1ページをご覧ください。

教科の目標にありますように、社会については、学習指導要領において、特に社会生活について理解するとともに、さまざまな資料や調査活動を通して情報を適切に調べてまとめる技能、多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握してその解決に向けた社会のかかわり方を選択、判断したりする力、社会的事象についてよりよい社会を考え、主体的に問題を解決しようとする態度を育成することなどが重視されております。

次に、社会3ページをご覧ください。

社会3ページから23ページまでは、調査研究結果を示しておりますが、14ページから17ページまで、様式4の調査項目③自然災害に関する内容を取り上げているページ数の具体的な内容の4年生の地震の取り扱いに関して特徴が見られましたのでご説明いたします。

社会14ページの東書では、4学年の自然災害からくらしを守る単元において、

18ページ全てが地震に関するものになっております。

次のページの教出では、4学年の自然災害に関する単元は、合計で34ページであり、そのうち16ページが地震にそなえるまちづくりとなっております。

一方、日文では、4学年の自然災害に関する単元は、合計で39ページありますが、地震に関しては10ページと取り扱いが少なくなっております。

次に、調査研究の観点B、札幌市として設定する調査研究項目についてご説明いたします。

答申のインデックス社会の社2ページをご覧ください。

社会においては、ナンバー1からナンバー3の7項目について調査研究を実施いたしました。そのうち、2の(1)課題探究的な学習の取り扱い、2の(2)資料の取り扱いについて、各教科書の特徴が見られましたのでご説明させていただきます。

まず、2の(1)課題探究的な学習の取り扱いについて説明いたします。

答申の社5ページとあわせてスクリーンをご覧ください。

これは、教科書東書の5年下の74ページ、情報を生かす産業の単元です。

東書は、つかむの欄にありますように、暮らしを支える産業の情報の生かし方について話し合い、身近なコンビニエンスストアを取り上げながら単元全体に関する学習問題をつくる活動も設定しております。

また、76ページの調べるの欄にありますように、情報を活用した販売の仕事について調べることを促し、写真や図、インタビューなどの資料を活用して探究していくことができよう工夫しております。

教出の6年の74ページ、国づくりのあゆみをご覧ください。

教出は、このようにページの上部に写真や絵、想像図などを掲載し、毎時間、この時間の問いの欄にあるような問いを設定する構成となっております。また、77ページの次につなげようの欄にありますように、次の学習の追求が連続するよう工夫されております。

日文の5年の118ページをご覧ください。

私たちの食生活を支える食料生産では、チラシの切り抜きや産地マップづくりなどの活動を位置づけるとともに、毎時間、わたしの問題を投げかけることで探究的な学習が可能な内容となっております。

次に、社6ページをご覧ください。

2の(2)資料の取り扱いについて説明いたします。

東書の3年、124、125ページをご覧ください。

市の様子と人々のくらしのうつりかわりでは、兵庫県明石市明石駅前の周りの様子の移り変わりについて、3枚の写真から読み取る活動が設定されています。また、その後のページでも、鉄道や道路、土地の使われ方などについて3枚

の地図を比較することで市や人々の生活の様子の変化について詳しく考えることが可能な内容となっております。

教出3年の140、141ページをご覧ください。

市のうつりかわりでは、横浜市新横浜駅の周りの様子の移り変わりについて、2枚の写真を比較して読み取る活動が設定されています。また、その後のページでも、主な鉄道と道路、緑の広がりなどについて昔と今を対比した2枚の地図を比べることで、市や人々の生活の様子の変化について比較しやすい内容となっております。

日文の3年の56ページから57ページをご覧ください。

畑ではたらく人びとの仕事において、絵グラフを使用しており、第3学年の児童にとって農作物の量の違いについて理解しやすい内容となっております。

以上、社会科の答申の概要についてご説明させていただきました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、委員の皆さんから、ただいまのご説明に対しましてご質問がありましたらお願いいたします。

いかがでしょうか。

それでは、私から、領土に関する内容の取り上げ方について、3者において違うところがありましたでしょうか。

○社会小委員会委員長 領土に関する取り扱い方について、3者の特徴等をお話ししたいと思います。

まず、3者とも日本の国土の位置がわかるようにしっかり掲載されております。特に、どの教科書も写真資料もあわせて掲載しており、位置であるとか周りの国々、周りの海、それから東西南北の端などについて詳細に掲載されております。

その中でも、教育出版については、5年生の水産業の学習の中で掲載されているところが、北方領土について記載があるのが特徴です。これは、5年生の社会の寒い土地の暮らし、根室の事例を扱っておりますが、水産業に携わる方々のお話として北方領土が出ています。ですから、学習の主たる目標としては、食料生産の確保に励む人々の営みについて触れておりますが、その中でも北方領土について触れているページです。

教出については、もう1ページありまして、同じく5年生の寒い土地の暮らしの学習の中です。

寒い土地の暮らし、北海道の事例を取り扱っておりますが、そこで暮らす人々の悩みや願いについて触れているページがあり、その中で、北海道とロシア連邦と

の関係ということで北方領土を取り上げております。

以上が特徴かと思えます。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

○道尻委員 防災の学習についての取り上げ方について、それぞれ特色がありましたら教えていただきたいと思います。

○社会小委員会委員長 防災については、どの会社も4年生と5年生で取り扱っております。4年生の場合は、自然災害から人々を守る活動、それから、5年生は、国土学習の中で我が国の国土の自然環境と国民生活の単元の2単元の中で取り扱っておりますが、ここでは、特に4年生の自然災害の取り扱い方についてご説明したいと思います。

まず、東書の4年の地震からくらしを守るページをご覧いただきたいと思います。

地震からくらしを守るでは、地震が発生した際に身を守る方法について、自分にできることを考えてから市の取り組みを考える展開で学習する構成となっております。具体的で身近なことから考えることで、興味・関心を高めるような工夫が見られます。

引き続きまして、教育出版4年生の地震に備えるまちづくりのページをご覧ください。

この単元では、市の取り組みについて学んだ後に、自分たちでできることを考える展開となっております。市の取り組みをもとに、身の安全をより確かにするためにできることについて考えることが可能な内容となっております。

日文については、主たる取り扱い事例は、地震ではなく、水害を取り扱っております。

本市においても、56水害等で水害の甚大な被害になったこともありますので、そういったことと関連づけながら指導することが可能な内容となっております。

以上です。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

○石井委員 観点Bの3番、共に生きる喜びを実感できる学習活動の推進で、もし委員会で各者の特徴が何か話し合われていたら教えてください。

○社会小委員会委員長 それでは、ともに生きる対象はさまざま多様性を尊重する人権教育を標榜する以上、さまざまな方々とともに生きるやり方があるかと思いますが、とりわけアイヌ民族に関して少しお話をしたいと思います。

アイヌ民族については、3者すべてにおいて、まず、6年生の教科書にアイヌ民族に関する記述があります。3者では、それぞれ、アイヌ民族について明治維新、北海道、沖縄との関係ということで土地の収奪であったり同化政策であったりということから始まって、その結果、生活の困窮に至ったとか、差別に遭ったことなどに触れるほか、そういった歴史的な経緯を踏まえ、先住民族決議等に、現在について、3者ともつまびらかに書かれております。

6年以外でアイヌの記載があったのは東書と教出ですので、その二つについて、さらに詳しくお話しします。

東京書籍では、5年生の寒い土地のくらしの中で、アイヌについて触れております。このページは、二、三ページ紙幅が割かれておりますが、表題どおり守ってきた文化を受け継ぐということで、アイヌの文化はどのようなものだったか、そのアイヌの文化の具体について、アットウシ、チセ、ウポポなど、その具体について示すだけでなく、特に右側のページにありますようにアイヌ語地名について詳細に掲載されております。アイヌ語由来の北海道の地名について詳しく掲載されております。

また、6年では、どの会社も取り扱っているアイヌ民族の先住民族決議についても5年生で触れているのが東書です。

それから、教育出版は、自然条件と人々のくらしの5年生において、見開き2ページでアイヌについて教科書選定に資するような内容が掲載されております。表題は、自然とともに生きる人々のくらしです。

ですから、東書のほうは、文化の具体について詳細に掲載され、アイヌ語の地名などを皮切りに掲載されておりましたが、教育出版のほうは、特に考え方、アイヌ民族の自然に対する考え方、例えば左下のほうにサケ漁が載っていますが、全部とりきらないでおくとか、全て余すところなく利用するとか、そういった考え方について挙げているのが特徴かと思います。

また、あわせて、その伝統や考え方について守り育むということで、伝統を伝えていくというコーナーも設け、紙幅を割いているところが特徴だと思います。

そのほか、3者において、障がいのある方、それから、お年寄り、女性等、さまざまな人権について、どの発行者も触れております。

○阿部委員 課題探究的な学習の取り扱いのところ、先ほどもご説明いただいたのですが、教育出版のほうでは、各セクションのほとんどのページに次につなげようというコーナーがあって、そこが学習意欲だったり主体的な学習

活動につながるのかなという印象を受けるのですが、ほかの2社にはそういうコーナーはありますか。

○社会小委員会委員長 課題探究的な学習について、今は1時間のというか、次につなげようというご質問でしたが、各社の関連するところにつきまして説明させていただきます。

東書のほうからご説明させていただきます。

東書については、6年政治国際編の34ページをお示しして説明させていただきます。

6年生政治単元でございまして、子育て支援の願いを実現する政治、これによりご説明いたします。

ここでは、ページの上にあるように、児童センターが素材として取り上げられております。東書においては、単元の導入で、この児童センターのように子どもにとって身近な教材、素材を取り上げて、その上で、つかむの欄にありますように、子どもを持つ親の願い、それから、どのような人がなぜ利用しているのかなどについて話し合い、次のページにありますようなクラスで追究していく学習問題をつくるよう促す展開が特徴となっております。これは、単元における学習問題と我々は呼んでおります。小委員会では、このように押さえております。

また、36ページの調べるの欄にありますように、この単元における学習問題に基づいた調べ学習が、この後、展開されていくこととなります。この例では、どのような活動が行われているのでしょうかということで、所長さんのインタビューを皮切りに、この後は、市役所や議会、税金の流れへと掘り下げて探究していくように工夫されております。

このように、東書では、毎時間毎時間ではないのですが、単元における学習問題をしっかり設定して、その学習段階ごとに、つかむ、調べる、まとめるという学習の段階を踏みながら、子どもたちは事実を蓄えてしっかり知識を得るような展開になっているのが特徴だというふうに思います。

続いて、教育出版です。

ご指摘のありました教育出版については、6年の32ページ、わたしたちの暮らしを支える政治にお示ししておりますので、ご説明したいと思います。

教出は、ページの左上に写真や絵を掲載し、その下に学習問題の問いを掲載しております。このページの同じく上の政治の単元ですが、左上の写真は少子化だったり、高齢化だったりをあらわしており、白黒写真は1977年でしょうか、大家族が当たり前だった、子だくさんが当たり前だった時代の推移を比較しながら、右側にグラフがありますが、子どもの数がどんどん減っているのに対して、折れ線グラフの高齢化は進行しているというあたりの事実を掲載し、その下に、それ

らを踏まえてこの時間の問いが設定されております。

また、右の33ページには、次につなげようの欄がありまして、では、どのような暮らしを望んでいるのかということについて、次の学習につなげるようなことが毎時間、例示されております。

このように、教育出版については、問いと投げかけがどのページにも毎回ありまして、これは、申せば、問いの連続を非常に重要視し、この問題意識を非常に重要視し、ページをめくれば見通せる、逆にめくれば振り返りができるというようなことを通して考えを深めるような構成になっているのが特徴となっております。

最後に、日文です。

日文は、6年で、これもやはり政治の単元です。わたしたちの願いと政治のはたらき、学習のページをご覧ください。

左のページにある二つの新聞記事、それから、右のページにある二つのグラフなど、多様な資料を掲載するとともに、こちらのほうも、毎時間、私の問題、これはページによっては私たちの問題という場合もございますが、私の問題を投げかけることによって探究的な学習が可能になる構成となっております。このように日文においては、全学年で子どもが持つ素朴な気づきであったり疑問をもとに追究していくことが可能な構成となっております。

以上が3者の特徴となっております。

○長谷川教育長 今のところと関連しますが、東書の6年生、東書は分冊になっていて、私が見たのは歴史編なのですが、例えば77ページとか119ページですが、学び方コーナーというところがあるのです。例えば77ページですと、歴史地図を読み取るということで、これはかなり高度な問題というか、これはどういうふうにするのでしょうか。子どもたちがそのままこれを読んで使っていくという考えでいいのでしょうか。

○社会小委員会委員長 東書については、学び方コーナーということで、随時、その都度その都度、学び方コーナーが掲載されていますが、実は、3者とも、表題は違うのですが、類似のページがあります。ただ、教育出版では、学びの手引というタイトルで、やはり学び方について、この場合は制作活動になりますが、こういうページが掲載されております。

また、日文では、学び方、調べ方コーナーがありまして、これは、学習計画の立て方なので、見る、調べるで、趣旨が多少違いますが、そういったことで学び方のガイドのようなものが3者とも載っているところが特徴になります。実は、教育出版では、3年生の最初に社会科の学習というのは、3年生にとってはやは

りそのあたりは難しいということもありますので、3年の巻末には、社会科ガイドということで、これはもう社会科導入の、接続の3年生の中身ですが、こういったものをお示しして、例えばインタビューの仕方、電話のかけ方、手紙の送り方などを示しているページがあります。

それから、東書については、先ほど、つかむ、調べるのご質問がありましたが、まとめてというページもこのようにあります。学習の進め方をガイドしているページですから、随時、その単元、その地域方向に見合ったコーナーを設けて、両方を補完し合いながら各者は構成されております。

○長谷川教育長 レベル的には子どもたちが十分対応できるようにそれぞれの学年でこういうコーナーを設けているという理解でよろしいのでしょうか。

○社会小委員会委員長 発達の段階には見合っており、もちろん教師のほうで随時説明を加えながら実際には進めております。

○長谷川教育長 ほかにいかがでしょうか。

○佐藤委員 やはり課題探究的な学習の取り扱いのところに関連したことで、3者の教科書の記載を見比べてみますと、確かにキャラクターを出して説明や問いを重ねるという点では、3者ともそれぞれの工夫でやっていると思いますが、どちらかというところ、東京書籍と教育出版のほうの一つ一つのテーマに関する従来型の事項の説明というものが主であって、キャラクターによる発問であるとか、あるいは、つかむ、調べるにおける発問であるとかというのは、どちらかというところ自由な扱いで教科書が構成されているような気がするのですね。

それに対して、日文のほうは、キャラクターの吹き出し自体が発問になっていて、まずはそれを探究していくことで、まとめが小さい字になっているのですね。だから、どっちかというところ、発問のほうの主で、その発問をそれなりに答えを出していくと、小さい字で書いてあるまとめの部分に行き着きますといったような流れだと思えるのですね。そういう構成だというふうに関者の特徴を捉えておいて正しいものなのでしょうか。

○社会小委員会委員長 日文のほうは、今のご指摘のように、一人一人の興味・関心であったり、一人一人が興味・関心の発信であったり、一人一人の問い発信だったり、そういったことから解決の見通しを持ったり解決の方向性を探るといったことについて、特に丁寧に構成されているということについて小委員会でもやはり重ねて話題になっておりました。

その一方で、まず、東書については、先ほどのつかむ、調べるという典型例がありますが、教出についても、この時間の問いを次につなげるのが特徴かと思えます。社会科は内容教科でございますので、見かけ上、ご指摘のとおり、子どもたちがしゃべっているような構成であっても、必ずしも子どもたちの思いだったり気づきだったり問いであったりというふうになっていないページもあります。学習の内容について、問いは学習事項を示すものであったり、見通しを示すものですので、そういったことを漏らさずに網羅する意味で掲載されているページもあるのは事実です。

そんな中で、東書のほうは、先ほども申しあげましたように、子どもも、言葉ではない場合もありますが、単元における学習問題を重視して、どのように取り組んで調べるか、学ぶかにつながり、しっかり子どもに事実を蓄えさせて意味を考え、しっかり理解に導く構成になっていると思えます。

それから、教育出版のほうは、子どもの意識のもとに問いが連続して、見通しと振り返りが随時なされ、実感の伴った納得だったり、理解に導くような構成になっているのが特徴なのではということで、小委員会はそういう押さえで調査研究を進めてまいりました。

以上です。

○長谷川教育長 ほかにいかがでしょうか。

社会の教科書ですので、やっぱりどの教科書も学習資料を結構いろいろつけていただいています、その取り扱い方でそれぞれ特徴があれば教えていただけますか。

○社会小委員会委員長 先ほどと多少重複しますが、まず、東書のほうは、ワイド版の見開きを使ったダイナミックな資料提示がされ、子どもたちにとって観察しやすい資料が多数あるかと思えます。それから、教育出版のほうは、例えば比較したり関連づけしたり、総合支援がしやすいように、絞られた手法を掲載されているのが全体的な特徴かと思えます。

重ねてとなりますが、先ほどの3枚の写真と2枚の写真を見て、もう一度特徴をおさらいしたいと思います。

東書3年の先ほどの写真ですが、3枚あることによって、これは時代が違う3枚の写真です。これを比較することにより、子どもたちにどういうふうに見えるかといいますと、様子の移り変わりが次第次第に様子が変わっていくことについて発見していきます。例えば建物の様子、建物の高さ、数、それから、鉄道、電車、線路の数であるとか、つまり様子の移り変わりをどのようにもしっかりと確実に捉えていって、様子の移り変わりについて理解させるというのを資料としての

特徴かと思えます。これは、3枚のダイナミックな仕様でそれらを捉えやすいようにしているところが東書だと思えます。

それから、教育出版のほうは、あえて2枚使ってというふうに小委員会では理解いたしました。3枚は経緯とか推移がわかるように、そこが特徴かと思えますが、2枚を使った場合は比較になるので、この場合は違いに気づいて、例えば左と右では随分様子が変わっているけれども、何でこんなに様子が変わったのだろうという問いを見出し、その後、理由について考えていくというような、推移、経緯というよりも、気づきや問いを子どもたちが表出し合うことによって問題に気づき、理由を考えていくような活動展開になっているところが特徴だというふうに思えます。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

社会につきましては、対象となる教科書が3者ということで、東書、教出、日文ということでございます。

3者とも、選定の候補といたしまして、8月6日に引き続き審議を行って、1者に決定するというところでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、続きまして、社会小委員会の委員長から、地図の調査報告答申案で調査研究報告答申のご説明をお願いいたします。

○社会小委員会委員長 それでは、地図について説明させていただきます。

調査対象となったのは、東京書籍と帝国書院の2者、合計2点の教科書であります。

まず、調査研究の観点A、採択参考資料についてです。

採択参考資料のインデックス、社会採択参考資料の地図3ページをご覧ください。

ここから12ページまで、調査研究結果を示しております。

その中でも、地図においては、地図6ページの様式4の調査項目3、自然災害に関する内容を取り上げているページ数について、各教科書の特徴が見られました。

東書は6ページ取り扱っております。99ページをご覧いただきたいと思えます。

このページは、日本の自然災害のページですが、右下に宮城県南三陸町のハザードマップについて取り上げており、自分の地域ではどのような災害が起こりやすいのか、比較することを通して考えることが可能な内容となっております。

帝国は、16ページ取り扱っておりますが、ここでは、93ページ、94ページをご覧いただきたいと思っております。

日本の自然災害と防災を取り上げたページにおいて、ご覧いただいたとおり、イラストを豊富に掲載し、過去に日本で起きた主な自然災害や災害を防ぐ工夫、そして、防災マップづくりなど、過去の災害事例と災害に備えた自分たちの行動のあり方について学ぶことができる内容となっております。

次に、調査研究の観点B、札幌市として設定する調査研究項目について説明いたします。

社10ページをご覧ください。

地図においては、ここにありますとおり、具体項目の2項目について調査研究を実施いたしました。そのうち、1の(1)地域社会の社会的事象にかかわる教材の扱いについて各者の特徴が見られましたのでご説明させていただきます。

社11ページをご覧ください。あわせて、東書の5ページの画面をご覧いただきたいと思っております。

日本の47都道府県のページに、海に面していない都道府県をいくつか言えるかななど、47都道府県についての問題を掲載しており、第4学年の学習と関連づけることにより、都道府県の名称と位置について、興味・関心を高めることが可能な内容となっております。

また、53ページの吹き出しには、北海道はじゃがいも、たまねぎ、にんじん、牛肉などの生産量が日本一なんだよという記載があり、地域の生産にかかわる仕事について興味・関心を高めることが可能な内容となっております。

次に、帝国の27、28ページ、そして、69、72ページをご覧いただきたいと思っております。

帝国においては、北海道地方を見開きで2ページずつ、合計すると6ページにわたって掲載しており、各学年の学習内容と合わせて活用することが可能な内容となっております。また、27ページには、広く見渡す地図、さっぽろ雪まつりなどのイラストが掲載されており、第4学年の学習と関連づけることにより、北海道の文化財や年中行事について興味・関心を高めることが可能な内容となっております。

以上、地図の答申の概要についてご説明させていただきました。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、ただいまのご説明に対しましてご質問がありましたらお願いいたします。

いかがでしょうか。

○池田委員 北海道の地名についてですけれども、その由来などに触れていることについて両者は何か特徴がありましたでしょうか。

○社会小委員会委員長 それでは、北海道のかかわりについての特徴についてご説明いたします。

まず、東書について、画面に映し出しますのでご覧ください。

東書においては、先ほどの5年生の教科書の掲載がありました。アイヌ語地名とそれに由来する現在の地名について、かなり具体的に詳しく掲載されているのが特徴です。

一方、帝国については、アイヌ語地名については現在の地名の掲載にとどまっておりますが、先ほども申し上げましたように、北海道地方について6ページ紙幅を割いているほか、特に札幌の中心部について掲載をしております。特に、これについては、冬に雪を解かすための施設ということで雪を解かすための地下水槽、雪を流す入り口から下水道等も示しながら、雪を克服したり雪に親しむような市民生活を送っていることについて、この資料の観察から気づくことができるような資料が掲載されているところが、北海道の中身としては特徴的となっております。

以上です。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

○道尻委員 二つの地図を比較しますと、東京書籍のほうが情報量が多いのかなというふうな印象を持っているのですけれども、3年生から使う教科書として使いやすさといいますか、実際に授業でどのような使い方をするのかということにもかかわってくると思いますが、その辺の優劣、どちらが適切かみたいな考えについて小委員会の中で話し合われたことがありましたらご紹介いただきたいと思っております。

○社会小委員会委員長 ご指摘のとおり、東書については、教科書と相まって利用されることを想定されており、統計資料が大変充実しております。そこが最も特徴的なのではないかということで、小委員会のほうでは話されておりました。特に3年生から地図を使用することが今回の学習指導要領の大きな変更点ですので、そういった観点から詳しく調査研究を小委員会ではしましたので、その点について少しお話ししたいと思います。

3年生から地図を使うということなので、使い方に関するガイダンス、オリエンテーションの意味合いを持つページが重要となってくると思っております。そういつ

た内容に該当するページについては、東書が10ページ、帝国が12ページになっております。

まず、東書のほうは、ご覧いただいておりますように鳥瞰図です。鳥瞰図からスタートし、鳥瞰図から視点を変換させて平面地図というふうに視点を変換させていくことなどを通して、真上から見たものが地図なんだよという地図の仕組み、それから、そのことによって見えづらく、死角になるようなところがなくなるとか、そのあたりの意味にも目を向けるように工夫されて、3年生でも取り扱いがしやすい導入について工夫されていたと思います。

それから、帝国です。

帝国についても、3年生からの必読、導入についてはかなり創意工夫されており、地図って何だろうというところ、これは、鳥瞰図の写真から入り、鳥瞰図を経て平面地図に至るような段階を踏んで導いております。その後のページについては、連続して方位、地図記号、距離の求め方など、見開き2ページずつ、一つのテーマとして子どもの問題意識に即しながら、一般的な使い方を身につけられるように構成されているところに特徴があると思います。

それから、先ほどの広く見渡す地図も、そういった意味では、さまざまな情報が入り過ぎていると、3年生としては、もちろん学習内容や学習目標との関連があり、あまねく3年生が学習をし切るわけではありませんが、3年生にとって必要十分条件となっているところはこういうページとなりますので、こういったページの設定もその工夫の一つかもしれないということで話題になっておりました。

以上です。

○長谷川教育長 今ご説明いただいたところで、帝国のほうは広く見渡す地図ということで、低学年というか3年生でもわかりやすい地図を別途用意しているという理解でよろしいのでしょうか。

○社会小委員会委員長 はい。

○阿部委員 帝国のほうにあります地図マスターへの道というところが、全てのページではないにしても、課題探究という意味では、子どもたちの興味・関心につながるのかなというようにちょっと感じるころがあるのですけれども、これについて、小委員会の中で何か話題になったりしたことがありましたら教えていただければと思います。

○社会小委員会委員長 地図マスターの道については、巻末に解答が載ってお

りますが、おおよそ50程度設定されているかというふうに思います。これは、地図について、先ほど例えば3年生の接続導入期で何か苦手意識が起こってしまうような場合を忌避するような意味でも、ゲーム感覚であったり、実際に地図遊びではありませんが、地図旅行であったり、そういったことで子どもたちに地図に親しみを持たせるような活動を授業でも行いますが、そういった一環で、子どもの思いだったり問いであったりとかとはちょっと切り口の違うものであったり、それから、これは、もう正攻法のどの子も知識として身につけなければならないそういった設問も織り交ぜながら構成されているので、この地図マスターを追っただけでも地図についての相当な知見が子どもたちにおのずと備わるような構成になっているということで、関心の声が小委員会でも上がっておりました。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。

よろしいようでしたら、地図のほうも、帝国と東書の2者でございますので、2者とも選定の候補といたしまして、8月6日に引き続き審議を行うということでよろしかったでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、そのようにさせていただきたいと思います。

附田委員長、どうもありがとうございました。

○長谷川教育長 それでは、これで、協議第1号の本日の審議を終了いたします。

次回は、8月6日火曜日になりますが、小学校部会の全11教科13種目について審議をいたしますので、よろしくお願いいたします。

【閉 会】

○長谷川教育長 そのほか、各委員からありますでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、以上で、令和元年第15回教育委員会会議を終了いたします。

長時間、どうもありがとうございました。

以 上